

一九二一年・クロンシュタット叛乱の

現代史に於ける思想的水位

野 田 茂 徳

はじめに

もし、今歴史を獲得する \forall ということが可能ならば、それは唯一、己がいま生きているこの時間を、時代の強いる緊張の中で個的にのみ収斂させる存在の根拠に立つて耐えること以外にない。いかなれば、個とそれに対峙するところの類、社会、全体というカテゴリーとの関係性を、内在的対立概念とするだけではなく、そのことに固執することなしには、歴史における今日の時間を、奴隷の精神で生きること強いられてしまふだけなのである。

ところで、私たちが包囲する情況というものに何らかの変化というものが起きているのだろうか。「私たちが包囲する」のが情況であって、情況を私たちが包囲しているのではないからである。一九五〇年代、六〇年代、七〇年代の幾つかの世界史的レヴェルの事件を眼前にした私たちに、今日いかなる事柄が時間的に展開されているのだろうか。言うまでもなく、このような問いに対しては、各自に於いて、己れの軌跡を照らし出してみれば十分なことなのである。そのように対自的に歴史の時間と向き合わないかぎり思想というものは存在しようがないからである。このような対自的営為を欠いたところに、かつて繰り返され、そして現在も繰り返して行われている政治への卑少な追従を自から無自覚的に許している党派の学としての「歴史学」が存在している。これはまぎれもなく御用学であり、そこには政治に於ける神話の形成の方法以外の何ももない。

こうしたところに存する御用学者の日常性は、何も体制、反体制の区別もなく、のっぺらぼうに存在しているだけのものである。彼らはよく「科学的」研究ということを口にする。もちろん、それは神学的教義的に通底する根拠に立っているにすぎないものである。すなわちひとつの政治的勢力によって求められている神話である。御用学としての歴史の研究は、たとえば、わがくには党派の学にならなくても、或る外国政府の機関によって認知されれば、それはやはり党派の御用学と言うにふさわしいのである。もちろん、時代によってその位置づけが一定でないことも政治的なるが故に当然のことといわねばならない。

スターリン時代においては、「ロシア革命」なら「ロシア革命」について研究する歴史学の方法というものは、「スターリニズム」批判が全く許可されない上でしか展開されなかった。スターリンの死後、「雪どけ」の水の如くスターリニズム批判はどっと流れ出して来た。しかしこうしたことを正しいと思ってはならないのだ。そうしたことを是認する歴史学者こそ、スターリニズムに追従する者なのだ。すなわち、常に実務的役割を十分に果して、歴史学を皇帝学に従属させている元凶なのである。

フルシチョフ政権になっても、ソ連政府のスターリニズムの政治的継承は、ハンガリア革命の圧殺によって証明されたのであったが、もちろん「党派」の歴史学者の中からはだれひとりハンガリア人民の蜂起を支持したものはいなかった。しかも、今日では、わがくにのソ連史学者が、一方ではスターリニズムを批判し、その同じ口でもってスターリンの業績を歴史的事実として評価しているのである。そうした二転、三転する党派の御用学者にわが国のソ連史学者のほとんどすべての徒輩が何らかの形で結び合っているのである。こうした環境では、スターリニズム批判が徹底してできないのは火をみるよりも明らかなことだ。だから、スターリニストの亜流が、二十周遅れのランナーとしてグラウンドを廻り始めていることに何の恥らしいもなく、先頭を走っていると錯覚しているのである。もちろん、そうした御用学者やその「集団」が、どのような名称を名乗ろうと内容は同じなのだ。よく言うではないか、イタチはいつまでたってもイタチであり、ブタはいつまでたってもブタだ、と。だからスターリニズムが、ひとりスターリン個人の責任によって成立したのではないことはその政治権力構造と工業化政策をみれば判ることである。スターリンが踏襲したのはトロツキーの戦術であり、レーニンの戦略である。いつてみれば、スターリニズムとは政治的に伝承されたトロツキズムとレーニズムのことなのである。しかし、スターリンのみが誤りを犯しているのであり、トロツキーもレーニンも正しい、というのは誤りである。ポリシェヴィキ政権の下ですでにトロツキー、レーニンのポリシェヴィキ以外の党派に対する弾圧の方法をじっと見守っている

たスターリンが、その方法を、そのままコピーして左翼反対派の追放に使ったのであった。このことをぬきにしてクロンシュタット叛乱を論ずることはできない。

1

クロンシュタットとは何であったのか。メキシコに亡命中のトロツキーは、スペイン革命の前線に向って飛ばした檄の中で、一九二一年クロンシュタットの革命的兵士、労働者、市民を虐殺したことを当然の如く述べたのであったが、それはアナキストを名乗るブラグマ・アナキストを例に上げ、スターリニズムの反革命と闘っていたスペインの革命的アナキストやイタリアをはじめ各国からやってきたアナキストの存在を平然と無視したものであった。これは、スターリンと五十歩、百歩の見方であった。クロンシュタット・ソヴェートのポリシェヴィキへの叛乱とウクライナにおけるマフノ農民軍の活動への弾圧は、トロツキーにとっては大きな躓きであったのではなく、トロツキズム・スターリニズムの政治的肅清の論理を自から作った原点でもあったのである。わがくにのトロツキズムあるいはその亜流による一九二一年のクロンシュタット叛乱論などが、数年ごとに評価を反転しているさまを見ると、その無節操な論理の展開ともども、それらの事柄に対して、所詮白いイヌは赤いペンキを塗ってもイヌには変りはないのだ、ということをおぼろげに確認することだけのことである。

ところで、ソヴェート・ロシアの地図を開いて、クロンシュタットという地名を探してもなかなか見つからない。レニングラートの西方三十キロ、フィンランド湾に、あたかも戦艦の如く浮んでいるコトリン島の東部に、すなわちレニングラートに面して、クロンシュタットの町や港はある。コトリン島、すなわちクロンシュタットからレニングラートに向って右側の本土の海岸にあるクラスナヤ・ゴルカ、左側にあるリシイ・ノスという要塞で首都レニングラートは守備をかためられていた。フィンランド湾からレニングラートへの外敵の侵入はこうした頑丈な要塞によって不可能であった。クロンシュタットの住民は、一九二一年当時約五万といわれ、そのほとんどがバルト海艦隊の乗務員、守備隊の兵士で、その他に官吏、商人、工場の熟練工が居住していた。

しかし、一九二一年クロンシュタットで、突然叛乱が起きたのではなく、クロンシュタットにおける革命的伝統とでも言うべきものの上に、一九二一年の叛乱があるのであり、そのことを踏まえておけば、ポリシェヴィキの革命の前衛としてのクロンシュタットの分解作戦、トロツキ

によるクロンシュタットへの攻撃、そして彼自身の晩年におけるクロンシュタットへの、いいがかり的誹謗中傷と自己弁護のみじめさが明らかにするのである。

したがって、一九二一年のクロンシュタットの意味を論ずるに先だってまず、いわゆる革命前のクロンシュタットについて言及しておきたい。

クロンシュタットに要塞がつけられたのは叛乱から約二百五十年位前で、それは帝政ロシアの海軍の重要な基地でもあった。この基地・要塞の機能は、バルト海に向つての作戦活動が主要で、首都防衛のフィンランド海における最前線としてあった。

帝政時代のロシアにおいて、バルト海艦隊の乗組員及びクロンシュタットの水兵、守備隊員は、労働者の出身者が多く、政治的にも急進的な傾向の人が選ばれていた。帝政の将軍が、自から足元をすくうような人選を好んでしたのではなく、労働者の中から教育ある精鋭の新兵を選考したら結果としてそういう人たちになったというわけである。

帝政時代の海軍であるから、いわゆる民主的というような言葉や情勢が最初からあつたわけではないが、水兵たちは、その出身階級が労働者階級ということもあつて、ものごとくに意欲的であつて、当時自分たちの置かれている政治的情勢についての小さな討論のサークルを持つていた。そうしたことに加えて、さらに水兵たちは海軍の任務の一端として外国の港をしばしば訪問して、そこで亡命しているロシアの革命的青年の秘密文書を読んだり、外国の情勢を自分の眼でしかと確認したりしたわけであつた。国内に閉じ込められ、外国の情勢を知る機会もなつた農民や、陸軍の兵士よりは水兵たちはこうして帝政の矛盾と自分たちの歴史的任務について、考えることが多かつたのであつた。

また、革命的なプロパガンダは、旧帝国の首都ペテルブルクに近かつたことで、自然にしても伝わり、とくにペテルブルクの労働者や学生生のデモンストレーションに対し威圧的のみに対処する、すなわち残酷な弾圧を繰り返す当局の対応から、クロンシュタットの水兵及び市民たちは、首都で何が起きており、自分たちは何をなすべきかを考え、行動にうつる体制ができ上つてクロンシュタット——ペテルブルクを結ぶ赤い炎が燃えあがることもしばしば起こつた。

こうした場合、緊張がクロンシュタットを覆い、はげしい弾圧を受けたことは言うまでもないことである。遂には一九〇五年、六年、十年と水兵の叛乱が起つた。ロシア帝国の最も秀れた艦隊の一つであり、要塞であつたクロンシュタットで叛乱が起きたわけであるから、それに対す

る弾圧がどのような弾圧であったのか想像もつこうというものである。

ところで十七年の革命に際しては、左翼勢力の各派がクロンシュタットに中核をつくり、活動を開始した。

クロンシュタットが首都に近いということ、また市の住民が革命的な体験を経ているということで、左翼諸派は、クロンシュタットを革命の重要な拠点としようと力を入れていた。また彼ら、クロンシュタットの水兵を中心とした人々は、一九一七年二月革命においても、いち早く蜂起した。そしてクロンシュタット市は完全に革命側の支配下にはいったのであった。

クロンシュタットの革命的伝統というものは、こうして時間をかけて内容においても充実していった。一九二一年の意味を考えるためにも更にこの過程を確認しておこう。

ここで特筆すべきことはクロンシュタットの場合、一九〇五年から一九二二年の叛乱に至る歴史の中で、その水兵の革命的道德心というものも、ロシアの各地のそれと比較しても、高いものであったことである。それらの期間を通じて、彼らが、反革命の將校に対して処刑を行ったのは、一九一七年二月二十七日と二十八日の夜で、約二百人に対して行われた。これは、一九一〇年の叛乱に参加し、失敗した数百人の水兵を銃殺するように命じた將校がいたからであった。反動的上級將校は、常に、水兵と対立し、水兵を人間あつかひしたことはなかった。そうしたことに對する憎悪が蓄積していたこともあったが、処刑は反動的惡徳將校に限られて、その他の兵士へ波及していくことはなかった。ところで、こうした帝政時代の將校との戦い——それは激しい弾圧を受けたものであったが——の過程を、そして結果をよく見ないでポリシェヴィキの官僚は、一九二一年のクロンシュタットの叛乱に際しては、ポリシェヴィキの活動家や家族が暴行を受け虐殺されていると宣伝した。

これは全く事実無根の中傷であり、クロンシュタットの叛乱に敵意と惡意をもって、全国に流したデマの一つであった。クロンシュタットの水兵、労働者、技師等といった人々、これらの革命的に武装された人々は、言論の、思想の、信条の自由は勿論、左翼的でないかなる集会及び活動も相互に保証する精神、つまり、そうした人間に對する信頼を革命的伝統の中でつちかって来ていたわけであって、そうしたものがなければ、叛乱は、革命の基盤などとは無縁の所詮、革命をかたる官僚の「てすさび」にすぎなかったであろう。

したがってクロンシュタットの人々にとってハ武装Vとは単に銃をもつことではなく、人間的な存在における、あらゆる抑圧に對する姿勢の問題であった。まさに、何のためにハ武装Vするののかという問題がハ武装Vというものを保証するものなのであった。

ところで、クロンシュタットでは、一九一七年二月体制の下で五月に入って自主的にソヴェートが組織された。そのメンバーのほとんどは右派社会革命党とメンシェヴィキであった。臨時政府は、クロンシュタットのソヴェートに対し、自分たちの傀儡をつくり上げようと試みたが、そうした統制がうまくゆかないとわかると、クロンシュタット全体に対する弾圧の口実をつくろうと、挑撥をはじめた。悪意にみたち反クロンシュタットのキャンペーンがなされた。例えば、次のようなことが言われた。

「クロンシュタットはロシアから離脱しようとしており、彼らの自治共和国を宣言している。」

「クロンシュタットはドイツと単独講和を結ぼうとしている。」

「クロンシュタットは自分たちの貨幣を鑄造している。」

かくの如き悪意に満ちた嘘がロシア全土に向って言いふらされたわけであった。

このように、クロンシュタットを臨時政府が敵意を持って、誹謗したのも、クロンシュタットの革命的伝統を怖れていたためであった。そうした「反動」に、クロンシュタットはソヴェートをより左翼的に再組織し、ポリシェヴィキ、最大限主義者、アナキストが参加した。

ケレンスキー政府の正体をみたクロンシュタットの人々は水兵を中心に一九一七年七月、ペトログラートにデモをかけた。クロンシュタットの水兵、陸軍兵士、労働者の男女は、赤旗、黒旗をもってペトログラートに上陸し、十月革命の合言葉であり精神であった、「すべての権力をソヴェートへ！」というスローガンを書いたプラカードをかがげ、タヴリダ宮殿に向って行進した。参加者は約一万二千人といわれ、ここはその規模の大きさに注目しておく必要がある。

ケレンスキーはデモ参加の水兵を逮捕しようと計画したりしていた。デモ隊に対する攻撃が、政府軍支援の一部の部隊によって開始され、クロンシュタット側は、数人の同志を失った。クロンシュタットのこうした首都で行われたデモに対し、ポリシェヴィキはクロンシュタットの水兵の期待を大きくうらぎり、陸軍兵士、労働者、ペトログラートの大衆は、デモに参加して来なかったのである。

歴史というものは、このような残酷な光景をはっきりと残しているのである。ペトログラートの一般大衆が参加しなかったというのは、彼らが「事実」をどのように理解して行くかによって変わらうる事態といえるが、問題なのは、ペトログラートの諸党派の態度である。言うまでも

なく、指導部は臨時政府の側にたっていたのである。であるから、クロンシュタットの兵士のデモを心よく思うわけはなかった。クロンシュタットのポリシェヴィキの代表は、クロンシュタットの意見を中央に伝えるべく振舞ったが、そうしたものが、無駄な努力であることを、中央委員会の無反応で知らされるのであった。クロンシュタットのオルガナイザーは、中央からの伝達のみを忠実に実行すればよい、というのが中央委員会の態度であった。こういう官僚主義がすでにクロンシュタットと臨時政府との対立を通し、共産党の中に「存在」していることが明瞭であった。ポリシェヴィキは公式にはだれもデモに参加せず、クロンシュタット側の「黨員」も、「黨員」として参加したのではなく、党とは無関係なものとして参加したのであった。ところが、ポリシェヴィキはベトログラートのデモで、「中央委員会」のイニシアルの入った赤旗を立てた装甲車を先頭に突然もって来たのである。デモに対する意志表示もないまま「赤旗」をもって来るとはどういうことなのか。クロンシュタット側では、すでに自分たちの赤旗、黒旗、プラカードがあり、しかも主催はポリシェヴィキではないので、クロンシュタット・ソヴェートで行動している旨伝え、ポリシェヴィキの「中央委員会」の装甲車をうしろにもって行ったわけであった。

この日、トロツキーはクロンシュタットの兵士、労働者に挨拶はおろか、姿をみせることさえもしなかった。レーニンは型通りの「演説」をして、さっさとバルコニーから姿を消した。ここで、さきほど述べた、突然デモの先頭にポリシェヴィキ「中央委員会」の旗を立てた装甲車が来て来た理由を考えてみる価値がある。そうすれば、ポリシェヴィキの、この時点での位相が明らかになるのである。すなわち、それは、クロンシュタット・ソヴェートの行動を支持したのではなく、デモを統制するためであったのである。

こうしてクロンシュタット・ソヴェートの首都における行動の「挫折」は、彼らが主導する新たな革命によって「二月体制」を打破する以外ないことを証明したようなものであった。それを裏付けるかのように、彼らがクロンシュタットに引き揚げた後、再びいわゆるブルジョワ新聞は、クロンシュタットはドイツの資金によって立ち上ったのだ、という中傷記事を書き始めた。これに対して、クロンシュタットはソヴェートの強化によって革命を進めて行くことが、ロシアの民衆にとって一番いいことだと思ひ、そのために、クロンシュタットはロシアの各地に使者を送り、自分たちの主張、すなわち、すべての権力は政府や党ではなく、ソヴェートに、という真意を伝え、ロシア各地にソヴェートの建設をうながしたのである。使者のうち何十人もの人が逮捕されたが、クロンシュタットは、更に使者を送り続けた。

クロンシュタット・ソヴェートの活動と各地方への直接伝達方式が、「二月体制」に大きな動搖を与えたことは判然としていた。ケレンスキ

ーにとってクロンシュタット・ソヴェートが存在することはもちろんのこと、革命的兵士が存続していることがいけないので、彼はその分解分散を企てることになったわけである。予め言っておけばこのやり方は後にトロツキーが、一九二一年にクロンシュタットに対して行なった庄弾の仕方と一致しているのである。

ケレンスキーはクロンシュタットの重砲兵隊をリガ戦線の危機を理由に移動させる計画を立てた。ところが、クロンシュタットはバルト海の守備には欠かせない要塞であることは、最初に述べたが、彼らの背後ではドイツ艦隊が攻撃の準備をしており、そうした事情を知っていながら、つまり、クロンシュタット・ソヴェートを崩壊させるためにケレンスキーは重砲隊を移動させようとしたのである。

クロンシュタット・ソヴェートにとってこうした口実で、臨時政府が「弾圧」しようとしていることはわかっており、どのように対応すべきか、会議が持たれた。結論を言うと、一個の分遣隊のみ移動するという妥協案であった。ケレンスキーはそれでもクロンシュタットの弱体化には役立つと思い込み、承認した。ところがクロンシュタットから派遣された兵士たちは、ケレンスキーの思惑とはちがって、逆にクロンシュタット・ソヴェートのプロパガンディストとして活動し、コルニコフを主謀者とする反革命の一揆の終息の後の本当の敵が、二月体制の政府であることを明らかにしていったのであった。クロンシュタットは「土地が農民に渡らないかぎり、また革命が完全に勝利しないかぎり、労働者は守るべきものをもたない」という確乎とした意志を持っていたのである。クロンシュタットは臨時政府、そしてその下でずる賢く権力の委譲を願っているポリシェヴィキ等に対し、ただ一言「すべての権力をソヴェート！」というスローガンをぶっつけたが、このスローガンは彼らが志向している革命がいかなるものであったかよく語っていると思う。

十月革命の緊張はこのようにして高められて来たわけであって、クロンシュタットの水兵が、再びベトログラートに行動を開始したあの十月の日々のエピソードは、あまりにも「有名」になっているので、ここで繰り返す必要もないと思う。

いま私は、革命クロンシュタットのドキュメントをできるだけ細かに述べてきたが、「二月体制」から「十月革命」にいたるプロセスを通して、クロンシュタットがロシア革命の中でどのような軌跡を残しているのかという検証をすることで、一九二一年の叛乱の意味が鮮やかに浮び上ってくると思う。つまり、予め述べるなら、一九二一年の叛乱は、この十月革命の伝統をもっともよく遂行しようとしたクロンシュタットの、ソヴェートから権力を抜きとり、党独裁を実現しつつあったポリシェヴィキに対する△叛乱▽であったわけである。この△叛乱▽は、ロン

ア革命におけるポリシエヴィキ党の作戦、すなわち一時的左翼連合の意味が何であったのかをよく示しており、また民衆とポリシエヴィキの関係がいかなるものであったかも雄弁に語っている。

十月革命の体制はつかの間の間のもので、左翼諸派が夢にみた八革命Vの体制は、ポリシエヴィキの一種の「クーデター」で消え去るのであった。十月革命の「偉大な伝統」と言うが、そのようなものは残り少なかった。「一九一七年」と共に消え去ったのであった。プレストーリトフスク条約(ドイツとの講和条約)が締結された後、クロンシュタットに対して再び臨時政府と同じやり方で、弾圧が始まった。ポリシエヴィキは、権力をポリシエヴィキ党に集中し始めたため、クロンシュタットなどは目ざわりな存在であった。合法的にクロンシュタットを武装解除しようと企み、クロンシュタットから精鋭部隊を追放するため、ありとあらゆる手段を使った。例えば、プレストーリトフスク条約により外敵の脅威はひとまずなくなったので、また革命が進行中の地方へプロパガンダのために行ってほしいという訴えを繰返し、辺境の地へ、古参兵——彼らは一九〇五年以来、もっともよく戦いを経験していた——が派遣され分散されはじめた。ポリシエヴィキによるクロンシュタット・ソヴェートの武装解除だと気がついた時はすでに遅く、派遣されたクロンシュタットの兵士は再びクロンシュタットの土地を踏むことはできなかった。

彼らはポリシエヴィキの策略にひっかかったわけであるが、このような作戦を、ただ黙って認めるようなことは「反革命」に加担する結果になる。このトリックは、かつての「人民戦線」の神話あるいはそのエビゴーネンども近い過去に言った「革新連合」というものの中にも影を落していることを記憶していてもいい。

このように、ペテン的手段によって武装解除を行っておきながら、トロツキーは、メキシコ亡命中に一九二二年三月のクロンシュタットの弾圧行為について、革命を支えて来た古参兵はクロンシュタットを離れていたの、クロンシュタットに残っていたのは、ものの判らぬ新兵たちばかりだったと言っていたのであるが、トロツキーのペテン的な言辭もまた、スターリンのそれと五十歩百歩の違いでしかない。

一九一八年四月、ポリシエヴィキ政府はモスクワ、その他の都市でアナキストの諸組織に攻撃をしかけ、その結果機関紙の発刊はさしとめられ、アナキストの闘士は逮捕された。かつてトロツキーは、二月体制に反対してベテログラードでデモを行ったクロンシュタットの水兵に向か

って「クロンシュタットの赤色水兵の諸君は、革命をおびやかす危険の報道を聞くやいなや、ただちにここへ馳けつけてきた！ 革命の栄光であり、誇りであるクロンシュタット万歳！」と言ったのであるが、その「革命の栄光」を再起できぬようにし、地方へ革命の宣伝に派遣された兵士はクロンシュタットの危機に際して帰ろうとして、途中で阻止され、戻ることができぬのであるから、逮捕監禁されたも同然であった。ボリシエヴィキが、自分の党派以外のものとの蜜月の時は終わったことを告げるかの如く、狂奔したアナキストへの攻撃、投獄という作戦行動は、「すべての権力をソヴェートへ！」というスローガンを利用して、実際はねじ曲げた我田引水の宣伝をしていたのであった。すなわち、それはボリシエヴィキ党の独裁いってみれば「すべての権力をボリシエヴィキへ！」を目指したものであった。

どのような小さな批判でも、ボリシエヴィキは、それを口実にして弾圧を拡大して行った。トロツキーの「赤軍」は、ボリシエヴィキの暴力機関、いや国家の暴力機関と化し確実に任務を遂行した。ボリシエヴィキはあらゆる自発的な集会を禁じ、革命的ソヴェートは解体させられ、ボリシエヴィキの中央委員会のいいなりになる、傀儡ソヴェートがとって代るといふありさまで、革命の栄光も、理想も消えうせてしまった。ボリシエヴィキは、レーニンやトロツキーの指導の下に、このようにして「ソヴェート」をかたる組織によって全国の統一をしようと試みていたわけである。しかしボリシエヴィキに対する批判者の多くが、ベトログラートに連行され、消されたのである。

革命によって、身も心もハ武装していたクロンシュタットの労働者、水兵、技術者にとって、ボリシエヴィキ、赤軍の欺瞞にみちたスローガンに対し革命的行動をとる力をそがれてしまっている状態——自分の意思によって反革命にすぐさま反撃できないことが、どれほど無念だったことであろうか。労働者、兵士、技術者等のクロンシュタットに住む、あらゆる種類の職業の人によって自主的に構成されていたクロンシュタット・ソヴェートを、ボリシエヴィキ一党の下請機関と化してしまったこの事実は、十月革命の精神に対する蹂躪である。ソヴェートを破壊しつくしたのはボリシエヴィキのクーデターであり、それ以外の何ものでもない。「すべての権力をソヴェートへ」をねじ曲げ、ボリシエヴィキの支配体制を強化して行くことを「プロレタリアートの独裁」と称したボリシエヴィキのオルガナイザーたち、そして十月革命の「原則」を反古にした反動過程が、クロンシュタットに象徴的にみることができるのである。

もちろん、このようなボリシエヴィキの反革命の過程——一党独裁、他の党派の肅清は、クロンシュタットだけではなく、ロシアの各地で行われた。クロンシュタットと同じ、すぐれた、あの「戦艦ポチョムキンの反乱」の伝承によって知られる黒海艦隊に対しても同じである。

かくしてドイツとの講和問題で、エス・エル（社会革命党）がポリシェヴィキと訣別をして以来、もはや、ポリシェヴィキ以外のもの、すなわち、ポリシェヴィキの了解を得た者あるいはポリシェヴィキへの忠誠を誓った者以外は、公然と「ソヴェート」で活動することも、「プロレタリア国家」の政府の恩典をなにも一つ得ることもできなくなったのであった。

私は、このような事実をみるとレーニン、トロツキーの思想のうちに、ピョートル大帝以来のロシアの肅清の論理を實行することが「日常」の嚴肅な革命の行為であるかの如く思い込んでいる精神の暗黒を見る思いがするのである。そして、またスターリンの肅清は、そうした先達の継承であったのである。そしてこれらの論理をもっともよく知っていたのは皮肉なことにトロツキーであったと言うことができるのである。これはまた革命に於けるレーニンの負性的遺産であるといわねばならない。

2

ここでレーニンが大衆と前衛党の関係をどのようにとらえていたのか検討しておく必要がある。

「プロレタリアートの自然発生的闘争は、この闘争が革命家の強力な組織によって指導されないうちには、真の『階級闘争』とはならないであらう」とレーニンは一九〇二年に述べた。いわゆる「経済主義者」と呼ばれていた改良闘争主義者に向けてなされた論争においてである。そこでレーニンは、あきらかに大衆の自然発生的な高揚をおくれをとっている革命的「指導者」について論及するのである。

「現代の運動の強みが大衆の（そして主として工業プロレタリアートの）覚醒にあり、その弱みが革命的指導者の意識と創意性の不足にあるということは、今日までだれひとりうたがわなかったことであると思う」と。

大衆の自然発生的運動の高揚にくらべて革命的指導者の「意識と創意性」が劣っていることを認めるレーニンは、そこで革命は大衆の自然発生的運動の延長線上に起こるのではなく、革命家の「意識と創意性」の水準にまでそれを高揚させることによるのみ実現するのだという。すなわち、革命は大衆によってではなく革命組織によって遂行されねばならないという。

だが、ここで注意すべきことは、ロシアの自然発生的運動もいくつかの型に分けることができることである。

農民運動というより農民の暴動をその原初的形態とみることができるのであるが、そこでは、暴動の終局目標が課題としてあったのではなく、

抑圧に対する「絶望と復讐心」の現われであったことも認められる。だが、それがただの復讐心によるだけのものではなかったことも言っておかなければならない。武器を手にした農民の暴動は、どのような抑圧者にたいしても忍従が生命存在の限界点まで達した時点まで発動されることはなかった。農民にとって忍従もひとつの信仰であったのである。暴動が集団的であるのは、かれらがそこにひとつの信仰的自由の絶対的領域を意識した者たちの共同体^{ミッレタ}教会としての行動形態を見出したからなのである。信仰的自由の絶対的領域とは、他によって己れの存在自身を置換できない関係を意識することである。暴動が集団性による「信仰告白」と献身を兼ねるともいえるのは、生命存在への圧迫が、同時にそれ自身は信仰への圧迫にはかならなかったからである。ロシアの農民の暴動が、抑圧者に対する単なる復讐ではないのは、暴動の中に信仰を介在とした「自由」への絶対的視点があるからである。

レーニンは、農民の暴動の延長としての、労働者のストライキ、なかでも「自然発生的な」機械の破壊を、労働者の「一揆」としか見ないものである。「一揆」は労働者の闘争として明確に意識されたものではなく、ようやく一八九〇年代に突入して発生した労働者のストライキに「意識的」なものがみえるというのである。「すなわち明確な要求を提出したり、どういう時機が好都合かをあらかじめ考慮したり、よく知られているよその事例や先例を検討したりしているたぐいである。一揆が抑圧された人々のたんなる蜂起でしかなかったのにたいして、組織的なストライキはすでに階級闘争の芽ばえをあらわしていた」と。

だが、九〇年代の闘争も意識的芽ばえが生じていたにもかかわらずレーニンにとっては自然発生的な運動の範囲を出なかったと結論せざるを得なかった。自然発生闘争と社会民主主義（革命的マルクス主義）的闘争の相違をレーニンは強調する。レーニンによれば、「一揆」的な闘争が組織され、労働者も雇主との対立に目ざめたストライキを展開したにもかかわらず、それは労働者と雇主の対立を現象的に把握しているだけのこと、対立の根本に眼を向けていない。つまり労働者と雇主とは根本的に和解することの出来ない政治的社会的構造をもっている、という関係を意識した妥協なき闘争の意識を所有した者のみが社会民主主義的闘争を組めるというのである。

階級対立の根本的構造を把握する意識が欠けているのが自然発生的運動であるという。レーニンは労働者の自然発生的運動をどれだけ積み重ねてみてもそこからは歴史的転換は生じないというのである。経済的要求を掲げることは組合主義と政治における議会主義に陥るといっているのであるが、労働組合も工業プロレタリアートの組織として歴史的必然の中にあるということになる。

ここから、レーニンは労働者の自然発生的に経済要求闘争に社会民主主義者が満足していること——そういったひとびとを「経済主義者」と呼んだのであるが——から、工業プロレタリアートの革命的任務を意識させることが必要だという。それは、労働者大衆が自ら自覚するのではなく——かれらはそのような意識をもっているはずがない——「この意識は外部からだけでもたらしうるものである」と。

そこで、「自然発生的」運動に追い越されてばかりいる社会民主主義者の活動の欠陥に立戻らざるを得ないのである。「自然発生的」運動が、労働者の経済的条件あるいは環境の改良闘争に終始するであろうとは言ったものの、現実の闘争の展開においてみられるのは、革命的「指導者」の意識をいつも抜き出ている「自然発生的」運動があることだけである。歴史的意識をもたない労働者の現実が先行した意識を越える、この「不幸」な現象は革命家の間に任務がたたく提起されていなければならず、革命的「指導者」の任務さえしっかりと提起されれば組織者としての手腕が発揮されるというのである。

ただし任務とは、ひとつには社会民主主義（革命的マルクス主義）者の歴史的必然の把握であり、ふたつには、革命的「指導者」の革命党の性格と「革命家」とは何をもって基準とすべきであるか、という問題への態度決定である。

レーニンによれば、革命家は中途半端に職能を発揮するのではなく、職業革命家として労働者をたすけなければならない。すなわち革命家は職業的煽動家、組織者、宣伝家、配布者となることを自分の義務として自覚していなければならないのである。次のように、マルクスは『共産党宣言』の中でいった。「共産主義者の当面の目的は、あらゆる他のプロレタリア党の目的と同一である。すなわち、階級へのプロレタリアートの形成、ブルジョア支配の打倒、プロレタリア階級による政治権力の獲得である」と。このような目的のために、革命家は労働者を職業的に煽動したり、組織したりしなければならぬ任務があるのである。レーニンは社会主義的信念の清新さを保ち、敵との闘争にもちこたえられる視野と経験を身につけさせるために、職業革命家としてそのような人材は工場で日に十一時間も働かせてはならないのだ、かれらの生活は党費でまかない、適当なとき非合法状態にうつれるように保障すべきだ、という。

こうしてレーニンは「自然発生的」運動にみられる労働者大衆の身近な直接的要求から、一気に歴史的課題に挑戦して行く職業「指導者」の養成を緊急な革命党の課題にしたのだ。合法的マルクス主義者の活動が経済的要求を満たす闘いの下僕の位置にしか留まり得ない現状からいえば、レーニンにおいてロシアのマルクス主義があらためて『共産党宣言』の原則に立返ったのであった。ツァーリ専制主義に対する闘争

が、同時にブルジョアジーに対するものでもあるところのプロレタリア革命の原則が確認されたのであった。そこで、プロレタリア革命の牽引車であり先導者の役目を荷なうプロレタリア革命党と二十四時間専従の革命家の必要性をレーニンは強調したのであった。

自然発生的労働者大衆の運動にレーニンが運動論の根拠をみいださないのでみならず、「自然発生的」運動の外に革命党を組織しなければならぬと思つたのは、労働者の「自然発生的」運動はほんらい資本への労働の従属にたいする労働者階級の本能的な反発と抵抗にほかならない、それゆえに、たやすくブルジョアのイデオロギーの支配の方向に進まざるをえない、と判断したからである。こうした判断に立って彼は経済闘争に対する政治闘争の優位を説くのである。こうして、ブルジョアの経済闘争に落着させるような「経済主義」から労働者の意志を革命的な社会民主主義の庇護のもとに引き入れること、すなわち、すべてこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である、というマルクスの明快なハことばVを導きとして、ロシアに階級闘争を荷なう革命党、しかもプロレタリアートの歴史的任務を荷なう革命党が建設されることをレーニンは要請せざるをえなかったのである。

一九〇三年七月、ロシア社会民主労働党第二回大会がブルッセルで開かれた。会場は後にロンドンに移されたが、これが実質的にはロシアの社会民主主義者が全国的組織として会合した第一回大会だった。一八九八年、ミンスクで開催された大会は、九名の参加者で行われたが、大会で選出された中央委員会はまもなく逮捕された。大会はロシア社会民主労働党の創立を宣言したのだったが、全国組織としてのみならず、各組織を大会に組織することも十分ではなく、「ロシア社会民主労働党」はその実体をもたないままであったのだ。そういう意味で、第二回大会がロシアのマルクス主義の革命党の実質的第一回の会合であった。それと同時に、それはロシア社会民主労働党のイデオロギー的傾向を明らかにしたのもであった。党建設は、党内闘争を通して基礎をつくるというもので、とくにレーニンの党組織論がその理念を最もよく代表していた。

レーニンは党を指導される大衆と区別された職業革命家の狭い陰謀的団体として、との批判が上ったが、そこでより明確に「党綱領を承認し、物質的手段と、党の一組織への個人的参加とによって党を支持する者は、党员とされる」という党员資格の定義を打出したのであった。これは、もっとゆるやかな組織によるべきだという、すなわち「綱領を承認し、物質的手段によって党を支持し、党の一組織の指導の下に常時個人的協力を行う者は、ロシア社会民主労働党の党员とみなされる」というマルトフの案と対立するものであった。この対立は職業革命家か、

そうでないかということによって党員の資格があるのか、そうでないかということを決めるところまで発展するのである。

レーニンにとっては、自然発生的運動が革命家の指導を越えて新たな情況を作り出しつつあるにせよ、しかし、それは、自由主義者の陣営に収斂される運動であり、そこで、どうしても、自然発生的運動のエネルギーをより拡大し、それを先頭で指導し、革命の歴史の軌道に乗せうるような強力な党が必要だったのである。それゆえに、強い党には、それを組織する強い人間が必要だったのである。労働者の自然発生的運動とは別に、革命的社会民主主義インテリの内的要請の発展として革命の教義は生み出されるのであり、革命家の組織は選択されたものによるべきだといふのである。

レーニンの著書『何をなすべきか?』はこのようにして、党組織の原則をすでに確立し、党内闘争の一里塚を築いていたのであった。党は中央集権による組織にすべきで、すでにツァーリズムとの闘争でナロードニキの「人民の意志」党の例がレーニンの前にはあった。七〇年代のすぐれた革命家の組織を手本にすることによって党を強力にすることができる。そのためには党は陰謀家の集団である必要があるのであった。

第二回大会は「黨員」とは何かという議題をめぐって決裂することになるのだが、一見どうでもいいような定義が、実は党組織論の中心命題だったのである。党の組織に参加する者が黨員であるという明白なレーニンの定義は、非合法下の闘争で実現困難な定義であったのである。マルトフの党に協力する者、党の統制下にある者を黨員とするという幅広さこそ、より労働者の支持を運動の中に反映できるものであった。それが当時の多数の社会民主主義者の傾向であった。そして西ヨーロッパの社会主義の傾向は、レーニンの提出したような陰謀家の集団ではなく、党の路線を決定するためには、黨員の発言が尊重され、大衆運動には、その参加者がそれぞれ自由を保持することが保障されるというものであった。党綱領を受け入れ、規則を犯さないかぎり何もしくても党の一員であることが認められていた。マルトフの定義はこのような幅広い多様な構成員であつてよいというものであった。

ロシアの非合法下の政治闘争は、大衆の運動とは無関係に内的革命党を要請していた。それは西ヨーロッパの社会民主主義政党が選んでいる大衆の自由意思が党活動を決定するような民主主義ではやって行けなかった。あくまでも中央集権の組織によって、党は常に中央の意思によって「統一」を保ち、党は軍事的指令系統によって行動するものでなければならなかった。下部組織から中央を批判することなどはありえないことであり、許されないことなのであった。

歴史的必然を荷なうプロレタリアートの党がどうして陰謀家の組織であらねばならないのか？ という素朴な疑問がアクセリロードから、また階級闘争が歴史的必然であることが明らかなのに党綱領で明記しないのはどういう理由なのか？ といった批判がマルティノフから出された。どれも理論的には社会民主主義の世界的傾向を踏出すものではなかった。歴史の歯車がプロレタリアートの世界に向って回転しているのであるから、レーニンのようなナロードニキの陰謀組織は時代への逆行としか映らなかったのである。

レーニンは陰謀家の組織であることに重大な革命性があることを強調した。これに対して当時、メンシェヴィキに同調していたトロツキーは、陰謀家の組織として党があるのではない、とレーニンの組織論を批判した。そこでレーニンは大衆運動と組織の役割について述べる。すなわち、党はあくまでも労働者階級の莫大な大衆の前衛でしか指導者ではありえない。大衆は党組織の統制と指導のもとで活動するが、総体として党員であるかどうかは自由である。この党の大衆にたいする指導者論はすでに陰謀家の組織が強い「指導性」を発揮できるための前提として述べられていたことであり、その繰返しにすぎなかった。大衆と組織の関係を浮彫りにしているのは、「指導性」をもつ陰謀家の党組織が闘争の現場でどのように大衆に映るかということであった。レーニンはいふ。「同志トロツキーの根本的誤りについて論及すればどのような結論がでるといふのか、考えてもみたまえ。かれは、この席で次のように言った。労働者の一団が根こそぎ逮捕されたとき、だれひとりとして党員がないということが明らかになったとき、そのような事態はなんと奇妙にみえることだろう、と。しかし、事は逆に、同志トロツキーの主張のほうに奇妙なのはなかるか？ かれは、いささかでも経験ある革命家ならば、だれしも当然喜びそうなことを悲しがっているのだ。ストライキやデモンストレーションの科で逮捕された数百数千のひとびとの中に、ひとりの党員もいないのならば、そのことは、われわれの組織がすぐれていること、われわれが任務を果していることの証拠でしかないだろうか。」さらにつづけていふ。「比較的少数の指導グループを陰にひそませて、できるだけ広汎な大衆運動に捲き込むことこそ、われわれの任務なのだ」と。

党は上から大衆を指導したり、陰に回って指導する組織として、大衆運動とはけっして同列に位置しないものである。むしろ、党はプロレタリアートの尖端的歴史的役割を代行するものであるとレーニンは主張したのである。党が大衆に歩調を合わせるのではなく、大衆は党に従って行動をすればよいことである。トロツキーやマルトフらの見解では、大衆運動と党の政治活動は同列のものでなければならず、また、特にトロツキーにとっては大衆運動において活動家は当然、逮捕されるにふさわしい行動をとらねばならないのであって、遠くから指令するよう

な存在ではなく、現場にいること、その現場で大衆の自然発生的運動の尖端であることが課せられていると思われていたのである。

レーニンは、ツァーリ専制主義との闘争を経ることによってブルジョア革命を達成し、さらに、プロレタリア革命への展望を拓くためには、知識だけ豊富な者たちに党員という資格を与えてはならないのだという覚悟をひときめていたのである。歴史的必然性を強調することによって生まれる日和見主義的傾向——労働者の「自然発生的」運動は、プロレタリアートの歴史的必然性による自然的成長に期待する傾向を増長させる結果を引出すことになりかねない。それは、事実上プロレタリアートに依ってプロレタリアートを見殺しにすることになるのである。レーニンには革命が革命家をつくる、というナロードニキのトカチョフの思想的遺産こそ、革命家の原型だと思われていた。トカチョフは、革命を経ることなく革命家は育たない、と繰返していたのである。

レーニンは党を「階級の党」と認識することによって、組織原則には、それゆえに一層厳しい管理が徹底されねばならないと考えた。彼は党員と非党員の差別、さらに非党員間の協力の度合、意識による差別、これらは必要な差別だという。「われわれは階級の党である。だから、階級のほとんど全体が(そして、戦時や内乱時代には、完全な階級全体が)、わが党のもとに行動し、できるだけ緊密にわが党に同調しなければならぬのである。だが、資本主義のもとでいつかは階級のほとんど全体、あるいは階級の全体がその先進部隊の、社会民主党の意識性と積極性にまで高まることができる、と考えるのは、マニローフ気質であり、『追随主義』であろう」と。

党と大衆の間には意識性や積極性の上で各々異なった位相と距離があることの現実を認識することなしには、すなわちプロレタリア大衆とプロレタリアート、そして革命前衛党の各々の現実の位相を踏まえないことには、党は前衛としての機能を果たさなくなるのである。前衛党は「階級の党」であるにもかかわらず、プロレタリア階級を「指導」するところの組織であり、階級そのものは各個のプロレタリアによって構成されているのであるが、その各々の意識は、「指導」されることによってある一定水準に高め確保されることが要請されるのであり、それを果たすのが党の任務なのだ。いわゆる綱領と戦術における「意思統一」とはその第一歩なのである。また、前衛党が「階級の党」であるゆえに、敵対する階級に対峙する戦闘的組織を保持することが、すなわち党活動の運命につながることなのである。

レーニンのこの主張は党権力の中央集権主義の原則によって徹底されるのである。すでに述べたように、指令は常に「中央」から下されるのみで、下部機関から上部機関に向う民主主義はない。レーニンは、「中央」の意思が、それ以外の要因によって左右されることを排すべきだと

考えていたのである。この厳格な規律によってのみ戦闘的な階級の党が存在できるといのである。中央機関に対する下部の意思などというものは、服従以外には存在しないのである。意見の相違は綱領と規約をもつ「中央」の方に統一される以外に許される方法はないのである。レーニンは第二回大会の党内闘争を足場にしてこの論理をはっきりと次のようにいう。「世界のどんな党のどんな中央機関でも、指導にしたがおうとしない人たちを指導する能力があることを、証明することはできないだろう。中央機関の指導にしたがうことを拒絶することは、党にとどまることを拒絶するのと同然であり、党を破壊するのと同然である」と。

レーニンがつくり出そうとしたのは、党への絶対服従がなされない下部機関の意思は「党を破壊するのと同然である」ときめつけるほど強力な中央集権の党である。党が陰謀家の組織として出発せざるをえない状況では、党は闘争の指令が一本の糸によって管理される、まさに全国組織である必要がある。分散した連合的な意思であっては闘争はできない。どのような非法の不意な事態にもそなえておける、耐えられる組織であらねばならないのだ。党が陰謀家の秘密集団であるとの批難に対しては、党の閉鎖性は「階級の党」の任務を認識するためのものである、と論駁される。すなわち、党には党外は勿論のこと、党内での挑発者あるいは国家権力の手先、あらゆる党破壊者を見つけ出し、破壊を早急にくい止めることが常に課せられている。党内にはいつも外部に対すると同じような戦闘性が保持されなければならないのである。が、ややもすれば日常生活下における「ブルジョア的環境」の前にプロレタリアートの階級認識は薄れがちである。日常生活の中に緊張を恣意的につくり出すには陰謀家の秘密組織の形態をとらざるをえないのである。

「階級の党」の純粋性は厳格な組織の規律をもってかろうじて保守されるものである。それなしには、合法マルクス主義者のように情況に追従し、原則を変質させてしまうような結果を導き出すのは火をみるよりも明らかである。党の純潔を保つものは鉄の規律以外にはないのである。党内の原則の変更をとなえる者に対しては、破壊者、裏切者との断定を下すことによって肅清して行く以外にはないのである。プロレタリアートは中央集権の党の意思に従い、組織単一の党によって組織される。プロレタリアートは、党という「革命的な試練を経た前衛」以外に権力を知ることではない。己れはそこで鉄の規則の下で整然と働くことを自己に課さねばならない。これが正しいプロレタリアの姿だということになる。党の規律に従わなかったり、弱めるような役目を果すものを、「事実上プロレタリアートにそむいてブルジョアジーを助けるものである」と判断することが正しいということになる。このようなレーニンの党組織論こそ、ロシア・マルクス主義が、西ヨーロッパの主流から離れ、ロシア的

風土の論理を選んだ第一歩でもあった。第二回大会において、レーニンは自分たちの立場をボリシエヴィキ（多数派）と名づけはしたが、実際は『イスクラ』編集局はメンシエヴィキ（少数派）に占拠され孤立することになるのである。

ロシアにおける「歴史的必然」を荷なわされているプロレタリアートの意思を代行する前衛党が、鉄の規律という秘密結社の論理を必要とするという主張に接して、かつてツァーリが鉄の規律を臣下と人民に強制した立論をいま一度思いおこす必要が生じてくるのである。すなわち鉄の規律による歴史的任務の遂行という大看板の前に、ピョートル大帝も国家の規律に反するものであれば、実子アレクセイ皇太子といえど鞭刑をもって殺害することをいとわなかったのであった。

鉄の規律が守られるためには肅清が存在する。肅清によってのみ規律を与える意志が原則的に貫徹されるのである。歴史的展開における場合、原則が守られるということは、戦略目標まで意志が達せられなければならない意味がない。前衛党がプロレタリアートの「階級の党」であるという自己認識に立つとき、そこにはたんなるサークルの趣味的意志ではなく、また個人的意志でもない全人民の意志に歴史的に収斂するプロレタリアートの意志が同時に共同体としての国家意志にまで拡大されるのがみられるのである。ボリシエヴィキが非合法下の小さなサークルにすぎなかった時期に、すでにレーニンはそれを先取りしたのであった。

スターリン時代にその絶頂に達したかのようにみえた政治的肅清に論理をみいだすとすれば、スターリンというひとりの政治家の意志の反映として肅清が存在したのではなく——多分に個人的肅清が存在したとしても——、それは国家意志によって、かれらの言う社会主義体制の安寧の意志として作用したと考えられるのである。それは、常に「階級の党」だと自認する前衛党、ボリシエヴィキの「中央」の意志にはかならなかったのである。肅清は「中央」以外に「中央」の意志の実体を全的に掌握することの不可能な意志によって断行されたのである。したがってスターリニズムとこんにちまで呼ばれてきた論理こそ、レーニンによっていち早く確立された論理であったのだ。スターリン個人の肉体的死滅がスターリニズムを死滅に追い込むものではなかったのである。現に、ソ連ではスターリニズムは現象的な情況によって、ひとつの時代の不幸として語られているのであるが、それは大きな誤りである。スターリニズムとは「スターリン時代」と同時に発生したのではなく、まさにレーニンの党組織論にその出発点があったのである。

本来、人間性、人間のもつ各個の創造性を尊重し、そのエネルギーをもって発展させる革命の現場——ソヴェートは、十月革命以後、「プロレタリア独裁」とか「プロレタリア国家」という大義名分のみをふりかざし、民衆を服従させようとするやり方のために窒息させられてしまったということができるのである。いや、そうしたことの中で一層悪いことには、ボリシェヴィキは「プロレタリア独裁」、「プロレタリア国家」というものを建前として民衆に向ってき、ボリシェヴィキへの批判を、プロレタリアートへの挑戦であると置き換えていったのである。このような論法は、今日のわがくにの「左翼」にも存在する。たとえば旧い左翼の日共などが、日共批判は「反共主義」であるという言い方である。またいわゆる「新左翼」の諸党派にも、日共と同じ感覚の論法が存在することが目につくのである。レーニン、トロツキー、スターリンの「末裔」であろうとする——党派であっても、ひとりであっても同じわけであるが、——系譜主義の「左翼」の根はどれをとっても地下茎によって結ばれているのである。生活の次元におけるこまごまとした問題にまで、そうした統制管理が行なわれ始めたとき、もつとも革命的な、ロシア革命の前衛として、発展してきたクロンシュタット・ソヴェートは、ツァーリズムやケレンスキー時代以前に、逆戻りしたわけであった。そこで、革命が、もう一度根源的に問われたのである。

「十月革命」が、クロンシュタットにとって意味があったとしても、その意味は、レーニン、トロツキー、スターリンの認識するそれと大きな距離があった。そうした実感がクロンシュタット・ソヴェートの人びとの間で拡がっていったのであった。そうした時、何が起きたのである。

クロンシュタットは、ブルジョワ的、反動的な体制へ戻ることを決して望んでいたのではなかったのであった。ところで一九二一年、ロシアの都市の労働者の生活は、革命によって成立したソヴェートの発展が疎外され、ボリシェヴィキに「統制」されることによって、崩壊の危機に瀕していたのである。兵士、労働者、農民をはじめとするロシア革命の前衛によって確立されたソヴェート権力の、十月革命の合言葉であり、精神であった「すべての権力をソヴェートへ！」というスローガンをボリシェヴィキは裏切っていた。即ち、地方ソヴェートの意志は、「中央」からの指令を待たねばならないように、党官僚によるソヴェートの支配がすすめられていたのだった。同時に、チェカ(全露非常委員会)による

人民の監視も強化されていたのであった。特に「戦時共産主義」の政策によって、農村では穀物の割当徴発、都市では食糧の配給制（それは不足し、労働者は戦前より実質賃金が下げられていた）が採られ、もはや各地方ソヴェートは政府の一機関に変貌をとげていた。

クロンシュタットは、そのことに重大な関心をもって見ていたわけである。クロンシュタット・ソヴェートへのポリシェヴィキの干渉は、そうした総体的意味をもった先制攻撃であった。ペトログラードでは、多くの工場は閉鎖され、労働者の生活は、十月以前に大きく逆戻りしており、労働者は政府に対してアピールやら「質問」を出していたのであるが、「なしのつぶて」で何の効果もなかった。なぜなら、ポリシェヴィキは、こうした人びとを「邪魔者」という風にきめつけ逮捕したからであった。また、本来、革命の創造的役割を果すべき多くの人びとをすでに投獄していたからである。レーニン、トロツキーのポリシェヴィキ政権は、このような一連の動きを、資本家や穏和な社会主義者の要求している、商業の自由、資本の自由、貿易の自由、さらには憲法制定会議の開催と、混同して理解し、そして、「反動思想」というきめつけを行ったのであった。

このような状態にあった一九二一年二月、遂にペトログラードの労働者は抗議行動に立ち上ったのだが、労働者の意見は拒否された。労働者の活動が「労働者の政府」によって抑圧を受けていることが明らかになりつつあった。革命の過程にみられる困難な状態は、けっして労働者を弾圧することによって克服されるものではなく、また地方ソヴェートを、官僚支配の御用機関にすることによって打破されるものでもなかったのである。まさに、革命の生産的エネルギーをソヴェートに集中することが、憲法制定会議や私的資本主義の復活などを主張する反動を人民自らが打破する営為に繋がるものだったのである。だが、政府のペトログラードの労働者に対する回答は、ロック・アウトによる緊急事態宣言であった。

二一年の二月末、ペトログラードで労働者の不穏な動きがあることを知ったクロンシュタットでは、ペトログラードへ、情勢を調べるために代表を送った。同時に、クロンシュタットに対して行われている中傷を粉砕し、自分たちの正しい意見を直接伝達するために、次のようなメッセージをペトログラードの工場、作業所等へ伝えた。

クロンシュタットの革命的エネルギーとクロンシュタットの大砲と機関銃のすべては決定的に憲法制定会議に対し、すべての後退するも

のに対して向けられるであろう。だが、しかし、もし労働者が『プロレタリア独裁』に幻滅を感じ、新しいいかさま前に反対して自由なソヴェートや、すべての思想的潮流——アナキスト、左派社会革命党、その他——の労働者や農民の言論、出版、組織、行動の自由を支持するなら、もし労働者が十月の真のスローガンをかかげて、第三の純粹にプロレタリアのものである革命に立ち上がるなら、そのときこそクロンシュタットは大挙して、勝利かしからずんば死かの決意をもって全力をつくし彼らを支持するであろう。

以上のメッセージがクロンシュタットの正しい意志表示であり、彼らは、自分たちのハ言葉Vを、まさに「勝利かしからずんば死かの決意をもって全力をつくし」証しする以外にないことも認識していたのである。クロンシュタットのメッセージがペトログラートの労働者を支えたことは事実であった。

事態は急を告げていた。ペトログラートでは二月二十二日から、各工場で自主的な集会が始まった。日に日に緊張は高まり、ポリシエヴィキはペトログラート守備隊を動員して武力鎮圧を始めたが、守備隊の中には、「労働者政府」が労働者を鎮圧に出かけることに動揺する者が出てきた。二月二十七日、ペトログラートの街頭には無数のピラがまかれ、壁新聞が貼られた。

その中の一つには次のようなものがあつた。

「政府の政策についての根本的な変革が要求されている。第一に労働者と農民は自由を必要としている。彼らはポリシエヴィキの規制の下に生活したいとは思っていない。彼らは彼ら自身の運命を自分たち自身で決めたのだ。」

「同志諸君、革命の秩序を守れ！ 組織的に断固として次のことを要求する。すべての投獄された社会主義者と無党派の労働者の釈放。戒厳令の撤廃。働く者すべてに対する言論・出版・集会の自由。工場委員会、労働組合、ソヴェートの代表の自由な再選挙。」

こうした労働者の「労働者、農民の政府」に対する基本的な要求は、受け入れられることもなく、二月二十八日になると政府はすぐに共産党軍を市内に入れ、トロツキーの「鉄の腕」が指揮する「容赦のない弾圧」によってペトログラートの労働者は、武装解除され、敗北してしまつ

た。敗北というにはあまりにも悲惨にも、革命の理念が力関係で、ねじ伏せられてしまったのであった。ペトログラートの労働者の敗北——すなわち労働者国家と称する政府による、労働者への武力鎮圧は、レーニン・トロツキーによって、始まり、こんにち、東欧で、アジアで行なわれていることを想起すると、ドイツチャー風の「歴史の皮肉」というような指摘では済まされないことであろう。

クロンシュタットは、こうしたペトログラートの情勢に対し、すでに送っていた、あの「メッセージ」の内容を、確実に実行にうつし始めたのであった。時に「一九二一年二月二十八日」であった。ペトログラートの労働者が、トロツキーの武力干渉で打ち倒された二月二十八日、クロンシュタットでは、水兵及びクロンシュタット赤軍守備隊の間で非常な速さをもって革命的結束が固められつつあった。

ペトログラートの労働者の要求は「プロレタリア政府」が目ざす「労働者国家」に対して当然のものであり、何ら革命Vを阻止するものはなかった。こうしたことをクロンシュタットから派遣された代表は自分の眼で確認したのである。

クロンシュタットはペトログラートの労働者の要求とそのため行動を支持し、三月一日、クロンシュタットの錨広場で人民大会を開催し、その中でバルト艦隊第一、第二戦隊の総会は水兵総会からペトログラートに送られた代表の報告を聞き、十五項目に亘る次の決議を、一万六千の、水兵と赤軍兵士と労働者の満場一致で可決した。決議の基本はソヴェートを言葉の真の意味で、復活させる手続と革命を左翼によってすすめて行くための提案で、ペトログラートの労働者に送ったメッセージと通じるものであった。

一九二一年三月一日バルト艦隊第一、第二戦隊総会決議

情勢を調査するために、水兵総会からペトログラートへ送られた代表の報告をきいたのち、現在のソヴェートが労働者と農民の意志を表明していない事実を確認し、次のことを必要事であると決意した。

1 ただちに秘密投票によるソヴェートの再選挙を行うこと。労働者と農民の間での選挙運動は、完全な言論と行動の自由をもってなされること。

- 2 すべての労働者、農民とアナキストと左翼社会主義諸政党に対する言論と出版の自由を確立すること。
 - 3 労働者と農民の組織に集会の自由を与えること。
 - 4 ペトログラード市とクロンシュタット市とペトログラード地方の労働者、赤軍兵士、水兵の協議会を遅くとも一九二一年三月十日までに、政党とは無関係に招集すること。
 - 5 政治犯のすべての社会主義者ならびに労働者、農民、赤軍兵士、水兵を釈放すること。
 - 6 牢獄あるいは強制収容所にいる人びとの状態を調査するために委員会を選出すること。
 - 7 政党がその思想を宣伝する特権をもったり、あるいはこの目的のために国家から金を受けとったりすることのないように「政治局」を廃止し、それぞれの地方で選出され、政府の財政援助を受ける教育、文化委員会におきかえること。
 - 8 すべての関門をただちに廃止すること。
 - 9 健康に危害のある職業に従事する者を除いて、すべての労働者の賃金を一律にすること。
 - 10 陸軍全部隊にある共産党選択突撃隊と工場の共産党衛兵隊を廃止すること。必要とあれば、軍隊では仲間たちが、工場では労働者たちが衛兵隊を編制できるだろう。
 - 11 人やとわず自分自身で労働することを条件に、農民にその土地での完全な行動の自由と家畜を所有する権利を与えること。
 - 12 巡回監査委員会をもうけること。
 - 13 雇用労働を使用しない条件で、家内工業の自由経営を許可すること。
 - 14 われわれは、軍隊のすべての部隊とクルサンティ（幹部候補生）にわれわれの決議に参加するように呼びかける。
 - 15 われわれは、われわれの決議の全文が印刷され、ひろく公表されることを要求する。
- この決議は戦隊の乗組員の大会で満場一致で可決された。二名が棄権した。

署名

大会議長 ペトリチェンコ

この大会に出席し棄権した二名とは、クロンシュタット・ソヴェートの執行委員長である、共産党員のヴァシーリエフと全ロシア中央執行委員会議長のカリーニンだった。彼らは、クロンシュタットの水兵を激しい口調で非難、中傷したが、戦艦「ペトロパポフスク」で、すでに決議された内容は、さらに一万六千の市民の出席によって満場一致で可決されたのであった。

ポリシエヴィキが送り込んだ、ヴァシーリエフ、カリーニンが、どのような権威を振りかざそうと、もはや、クロンシュタット・ソヴェートは、執行委員長ヴァシーリエフのような、クロンシュタットを武装解除し、クロンシュタット・ソヴェートを弱めるものとは、もはや一致するものがなかった。しかも、ポリシエヴィキの中央委員会のおどしや、眼前で繰り広げられたベトログラートの労働者への武力鎮圧、そうした緊張した状況の中で、一万六千の市民の参加による満場一致で、しかも、ペトリチェンコという一水兵の「議長」のもとで、クロンシュタット・ソヴェートは意志統一をしたのであった。

この「意志統一」は、だれかによって強制されたものでない、ということに注目しておく必要がある。これは、ひとつの地方ソヴェートが自らの意志で中央のポリシエヴィキに対する、歴史的拒否の現場であり、しかも、全ロシア中央執行委員会議長を前にしての公然たる意志表示であった。

ところでクロンシュタット・ソヴェートはこうしたバルト艦隊の水兵・乗務員の決議に基づいて、ちやうどソヴェートの任期が終ろうとしている時期でもあったので、すぐさまソヴェート機関の代表者会議を開き、新しい選挙法について考え、討議した。

クロンシュタットのこのような動きに対してポリシエヴィキの幹部は敏感に反応を示した。革命の牙城クロンシュタットが、ポリシエヴィキの政策を離れ、革命的諸要求を突きつけることが、「戦時共産主義」の否定であることは明白であった。地方ソヴェートの権力を共産党の支配下に置いた時点で、十月革命のスローガン「すべての権力をソヴェートへ！」はもはやポリシエヴィキにとって名目にすぎなかった。しかし、十月革命の後、すぐに、ポリシエヴィキはクロンシュタットの革命的兵士を地方へのプロパガンダ部隊として基地から離散させる方針をとって来たにも拘らず、十月革命の精神はクロンシュタットに根づいて、新兵に引き継がれていたのである。

すなわち、クロンシュタットに対する中傷はポリシエヴィキによって、モスクワ、ペトログラートにおいて開始されており、たとえばクロンシュタットは「旧制度」の将校や將軍によって反革命に動いており、それらの者がソヴェートの機関の支配者になっているというものであった。しかし、クロンシュタットで実際にソヴェートの代議員に選ばれた者は、水兵、赤軍兵士、労働者で構成されていた。しかもクロンシュタット・ソヴェートの反対者でないかぎり、また官僚的人民委員（ポリシエヴィキ中央の傀儡）の独断的な制度に反対の者であれば、どのような思想的背景があっても、たとえば共産党員であらうと、そのシンプであらうと、「自由」であった。クロンシュタット・ソヴェートの権力を、官僚統制から防衛するという原則だけ、はっきり認めている者であればいいわけである。

ところが、バルト艦隊の水兵ではなく、人民委員には当然ポリシエヴィキの傀儡として露骨に「クロンシュタットの権力はすべて、クロンシュタット・ソヴェートへ」という方針に反対し、ペトログラートに集結しつつあった赤軍の恫喝をたよりにして、クロンシュタットの中央への忠誠をとく、すなわちクロンシュタットに反対する者もいた。そうした共産党の小官僚は、逃げ出す以外になかったのである。クロンシュタットは、別にそうしたクロンシュタットへの反対者を逮捕までしなかったのである。

三月二日、水兵ベトリチェンコを議長とする「臨時革命委員会」、すなわちクロンシュタット・ソヴェートは、三月三日付の『イズヴェスチヤ』第一号に、次のような呼びかけを出した。因にこの『イズヴェスチヤ』はクロンシュタット臨時革命委員会の機関紙で、いわゆるソ連最高幹部会発行の政府機関紙『イズヴェスチヤ』のことではない。

クロンシュタットの要塞と市の諸君へ

同志および市民諸君、

わが国は苦難の時代を切り抜けている。すでに三年にわたって、飢餓、寒さ、経済的窮乏がわれわれを恐ろしいいきおいでしめつけてきた。国を牛耳っている共産党は大衆の結合を畏れ、全般にわたる腐敗状態から彼らをひき上げるのに無力であることを暴露している。最近ペトログラートとモスクワに動乱が勃発し、それは党が労働者と農民の信頼を失ってしまったことをはっきりと示しているのに、党は何の

注意も払おうとしない。労働者から出されている要求に何も払おうとしない。党は彼らすべてを反革命の陰謀者であるとみている。党は深く自分自身をあざむいている。

この動乱と要求はすべての人びとの、全労働者の声である。労働者の側に立った一致した努力と一致した意志だけが、国民に、パンとたき木と石炭を与えることができ、あたたかい着物を着せてやることができ、民衆の陥っている窮境を救うことができるのだということを、いまやすべての労働者、水兵、赤軍兵士ははっきりと知っている。

すべての労働者、兵士、水兵のこの意志は三月一日、火曜日のおわれわれの市の大会ではっきりと宣言された。その大会は第一、第二戦隊の乗組員の決議に満場一致で賛成した。

採決された決定のひとつは、ただちにソヴェートの再選挙を行なうことであった。ソヴェートにおける労働者の意志を効果的にあらわせるような、またソヴェートを活動的でエネルギーな組織とするようなこの選挙の平等な基盤を確立するために、海軍、守備隊、労働者のすべての組織の代表が三月二日、教育会館に集まった。この集会は新しい選挙のための基盤を成文化し、それから建設的な平和的な仕事、すなわちソヴェート制度の再組織化の活動をはじめようとした。

しかし、権力の代行者たちの脅迫的な演説のあと、弾圧のおそれがあるとみてとった代議員たちは、臨時革命委員会を設け、クロンシュタット要塞の行政に全権を委託した。臨時革命委員会は戦艦「ペトロパヴロフスク」におかれた。

同志および市民諸君！

臨時革命委員会はクロンシュタットや要塞や堡壘に革命的秩序を維持するよう最善の努力を払ってきた。

同志および市民諸君、

仕事を中止するな！ 労働者諸君は機械から離れるな。すべての従業員とすべての機関は仕事をつづけてくれ。

臨時革命委員会は、すべての労働者組織、すべての港灣その他の労働組合、すべての陸上、海上部隊、また市民ひとりひとりに支持してくれるようにと呼びかける。委員会の使命は、諸君と親密に協力して新ソヴェートの公正な選挙に必要な条件を確立することである。同志諸君、そのためには、秩序と平穏と沈着の状態をつくらう。

すべての労働者の利益となる正しい社会主義的な仕事を遂行させるために。

一九二一年三月二日

クロンシュタット

臨時革命委員会議長

ペトリチェンコ

同 書記

トゥーキン

4

一九二一年二月の終りから三月にかけて、クロンシュタットで起きたことのひとつひとつを、正確に順を追ってみると、クロンシュタットは、ロシアの革命が経てきた多くの困難を十分すぎる位、正しくみつめ、その上に立って革命が背負い込んでいる問題を解決しようとする方向を示している。また、革命を起こした労働者、水兵、陸軍兵士、農民を信頼して、その革命的エネルギーを、「十月革命の秩序」によって進めて行こうとしていたこともわかるのである。これに対して「プロレタリア独裁」という建前をふりかざし、実は「共産党独裁」を実行にうつして来たボルシェヴィキの方が、ソヴェートを官僚支配の場にし、人民への統制を行い、革命をすすめてきた者を信ぜず、党に官僚システムによる支配、そして、その暴力的遂行機関としての「赤軍」の形成という、およそ、党そして国家の廃止を志向しているレーニンの言葉と矛盾する逆方向の政策を進めていることが目につくのであった。

クロンシュタットは、歴史的革命の伝統を自からつちかかってきた、とすでに述べたが、ここではそうした伝統が、ロシア革命の原点として、 \wedge 革命の原点 \vee としてあらためて生命をもっていることを全ロシアの労働者、農民、水兵、陸軍の兵士等々に向かって告げ、共に闘わんことを訴えているわけである。

十月革命の数カ月後、すでにポリシェヴィキは抑圧をおぼえていた。すなわち、それはポリシェヴィキによるクーデタの始まりだったわけであるが、彼らの手口、すなわち今日から言うならば「古典的」になった他党派への中傷、弾圧の方法が、クロンシュタットの時点で、すでに全て出つくしている点に注目すべきである。先のクロンシュタットの臨時革命委員会の「訴え」に対し、あるいは、その前のバルト艦隊の水兵たちの「決議」に対して、事実無根のストーリーを捏造し、クロンシュタットをロシアの民衆と対立させようとたくらんで宣伝をやっている。こう

したやり方は悪しき「党派の論理」として、こんにちも生きつづけているのである。クロンシュタット・ソヴェート、あるいは臨時革命委員会に結集した市民、水兵、労働者、守備兵の行動のひとつひとつが、そうしたポリシェヴィキのやり方と対立するものであることがいままで述べた闘いのプロセスから十分にはっきりしたことと思う。

ところで、ポリシェヴィキのクロンシュタットに対する攪乱、中傷のキャンペーンの一例として一九二一年三月三日のモスクワ放送をあげておこう。クロンシュタットの『イズヴェスチャ』の二号に載せられているが、クロンシュタットでは、そうした外部から自分たちに向けられている敵対的行動をすべて公開しているわけである。なぜなら、彼らは、自分たちの行動を信じ、仲間の判断を信頼できたからである。それが、 \wedge 共同性 \vee というもののひとつの大きな「前提」だからである。

モスクワ放送の中傷記事というのは「すべての諸君！ すべての諸君！ 白色反革命の陰謀に対し武装せよ！ コズロフスキー元將軍と戦艦『ペトロバヴロフスク』の叛乱は、現在にいたるまでの数えきれない陰謀と同様に、協商国のスパイが組織したものである。フランスのブルジョア新聞『ル・マタン』がコズロフスキー反乱の二週間前にヘルシングフォルスから次のような通信を載せているが、これを読めば明瞭である。」

何が明瞭だというのであろうか。『ル・マタン』の記事というのは「 \wedge ペトログラードからの報道によれば、最近クロンシュタットに起こった謀叛につづいてポリシェヴィキ軍事当局はクロンシュタットを孤立させ、クロンシュタットの水兵や兵士をペトログラードへ近づけないよう、必要な手段をとっている。クロンシュタットへの食糧供給は指令のままで停止されている \wedge 」という記事なのである。これに、事実描写として「何がまちがっているか」をモスクワ放送は反論もしないで、次のように結論づける。「クロンシュタットのソヴェート・ロシアからの分離はパリから指導され、それにはクラレスの反革命スパイがかかり合っていることは明らかだ。いつもおきまりの話だ！ パリからの指令を受けている社会革命党員はソヴェート政府に対する謀叛をくわだて、準備がととのうや、真の主人——ツァーリの將軍——が顔を出すのだ。」

このような短絡による中傷は、繰り返されている。これは、わがくにの新旧の系譜主義的左翼の他党派に対する中傷に「伝統的」に生きている手法でもある。クロンシュタットはツァーリの將軍や將校を追い出した方であって、むしろ彼らを官僚に登用していたのはポリシェヴィキであって、何をか言わんやである。モスクワ放送の「いつものおきまりの話だ！」という言葉をそのまま共産党に突き返しておけばいいわけであ

る。

しかし、モスクワ放送やあらゆる通信機関を通じて流布される「反クロンシュタット」キャンペーンによって、事実が判断できない民衆は必然的に、クロンシュタットの八叛乱Vの事実が、ポリシェヴィキ官僚の手によって隠されてしまうので、クロンシュタットに偏見をもって見るということが起きて、ふしぎではないのである。「嘘」を本当といいくるめる論理が、こうして「ロシア」を支配したとき、十月革命の精神は、踏みにじられ、そのことに心を痛める者は八反革命Vのレッテルを貼られ消されて行くわけであった。

クロンシュタットでは、自から立ち上った労働者、兵士が、ポリシェヴィキ官僚の、驚くべき不誠実さによって、またクロンシュタットが「すべての権力をソヴェートへ」という革命の精神を遂行していることへの逆立した批難に対して、それまでポリシェヴィキ党員だった人びとが、つぎつぎに共産党と訣別しているのである。クロンシュタットの『イズヴェスチャ』は、そうした元共産党員の声明をそのまま載せている。一、二、そうした声明文をあげてみることにしよう。

「ペトログラトへ代表を送るというクロンシュタットの同志の提案に応じて、トロツキーと共産党幹部が砲弾を送って血を流したのを見て、私はもはや自分が共産党員であるとは考えなかった。共産党の演説は、かつて私の頭を変えたが、共産党官僚の行動はそれを再びもとに戻してしまった。

私は共産党官僚に彼らが真実の素顔をみせてくれたこと、このように私の誤りを私にわからせてくれたことに対して感謝する。私は彼らの手ににぎられた盲目の道具であった。

元共産党員第五三七五七五番

アンドレ・プラタチェフ

（『イズヴェスチャ』三月九日付第七号）

「同志および工業、陸軍、海軍学校の愛する生徒たちよ！ 私は三十年間もの間、この人たちに深い愛をもって生きてきた。私は、学ぼうとする人に自分の能力のかぎりをつくして光と知識を与えてきた。革命は私に新たな燃えるような感激を与えたのであった。私の活動は増加した。私はかつてよりもっといっしょけんめいに私の理想に献身した。共産党の『あらゆるものを人民のために』というスローガンの高貴な美しさのために私はすっかり鼓舞された。そして一九二〇年二月に私は共産党の党員証を得た。だが、クロンシュタットに七千人もいる平和な人

びとや、私の可愛い子供たちに向かって最初の銃口が火をふいたとき、私はこれらの無実の血を流した共犯者であるかもしれないと考えておそろしさにふるえた。私はもはや犯罪行為によって汚された思想を信じたり宣伝したりすることはできないときとった。そこで、最初の銃口が火をふいたときから、私は自分を共産党員であると考えることをやめた。

教師

マリア・ニコライエヴナ・チャテル

『イズヴェスチヤ』三月十日付号第八号

共産党官僚のどのような中傷、恫喝に対しても、クロンシュタットのポリシエヴィキ党員は、惑わされることもなく、また威嚇にも屈することもなかった。彼らには、自分自身の立っている八根廻Vが明らかであった。

共産党は、こうした場合の中傷の第一として、「帝国主義者の手先」といういい方をする。クロンシュタットにも、やはり、フィンランドの銀行家から資金が出ているとか、ドイツ、フランスのスパイと通じているという中傷がなされた。次に、ひと昔前までは「トロツキスト」というレッテルを貼ることで、貼られた方はそれが、「反共」のしるしであるようになっていた。こうした場合「トロツキスト」と呼ばれた人びとが「トロツキー」や「トロツキズム」の理解者でないこともあり、厳密な意味と一致していないことは言うまでもない。デマゴギーであるから、厳密な意味や、正確かどうかということが問われているのではないのであるから、つまり、誹謗中傷だけが目的のいい方であるから、彼らはそれでいいわけである。

一九二一年のクロンシュタットに向って攻撃をかけたポリシエヴィキは、デマゴギーをもって居直りを続けたのである。彼らには、個々の人間に対する思想的責任をとろうとするつもりがないのはもちろん、デマゴギーをつくり出している当人が、「党」とか「機関」の仮面をつけたままで、まじめに、己れをみつめることもなかったからである。彼らがつねに「集団」によって人を制することを考えることしかできないテクノクラートだったからである。つねに己れが「党」に所属したり、「イデオロギー」を信奉する以前に一個の人間であるということを、はじめから考えてみることがなかったからである。クロンシュタットのポリシエヴィキ党員が共産党に向って出した訣別の言葉は、人間としての自立であり、デマゴギーにみちたイデオロギーに対する、人間の自立のマニフェストであったわけである。

モスクワ放送は、その後も度たび「だまされているクロンシュタットの人びとへ」などと呼びかけたが、だれもだまされてなどいないわけ

で、そうした「モスクワ放送」が、もはや、ひとりひとりへのクロンシュタットの兵、労働者、守備隊兵士を相手に中傷をしていることに気づいていないわけである。その中傷は、ポリシェヴィキからクロンシュタットへ、思想的根底において、ロシア革命の理念と現実において根本的な対立を、仕架けているわけである。ここまでくれば、もはやクロンシュタットにとっては「すべての権力をソヴェートへ」という言葉に盛り込んだ自からの主張を、そして、プロバガンディストを派遣し、他の地方ソヴェートに送った「メッセージ」にもあったように、彼らの革命は「断じて途中で立ち止めることはありえない」のであった。彼らは「勝利するか、しからずんば死ぬ以外にない」ことを確認していたのであった。右翼にとって最も恐怖すべき存在であった赤色クロンシュタットは、同時に左翼の反革命者「ポリシェヴィキにとっても同じ存在であった。トロツキーの戦術によって古参の水兵たちがロシアの各地に分散させられたにもかかわらず、こうして彼らは自からロシアの革命の最前衛として再び立ち上ったのである。

5

クロンシュタットはポリシェヴィキの攻撃の中にあっても、ロシアの各地に向けて、クロンシュタットの情勢を伝え、また全国の労働者、農民に向けてのアピールを放送している。けっしてクロンシュタットにおいて、一要塞の生活次元でのエゴイズムから叛乱が起きたのではないことを知ってほしかったからである。その中で、「狼どもといっしょに吠えねばならない！」と題するクロンシュタット『イズヴェスチヤ』の論説は自からの叛乱の意味を鮮やかに伝えている。

「踏みにじられた労働者の闘争のときにあたって、ある者は、レーニンが偽善者でなく、真実を語っているのだと期待するかもしれない。労働者や農民は心の中で、レーニンをトロツキーやジノヴィエフと区別してきた。彼らはトロツキーやジノヴィエフの言葉は一言も信じなかった。しかしながら、レーニンについても彼らの信頼はもはや失われたのである。

何故なら、一九二一年三月八日、ロシア共産党第十回大会が開かれたとき、レーニンはクロンシュタット叛乱についてのあらゆる嘘言をくりかえした。彼は運動のスターガンは『貿易の自由化』であると宣言した。彼はその運動は『ソヴェートに味方してポリシェヴィキ独裁に反対している』と確信をもってつけ加えたが、彼は『白色反革命者や、ブチ・ブルジョア・アナキスト分子』という言葉を持ち出すのに躊躇しなかつ

た。

このように、けがらわしい言葉を吐くことによって、レーニンは自縛自縛することになった。彼は、その運動の根本は党の独裁に反対し、ソヴェートの権力に味方する闘争であると認めた。レーニンの苦悩は、彼のクロンシュタットについての演説を通じて明瞭にあらわれている。『危険』という言葉が絶えまなく使われている。たとえば彼は『われわれはわれわれにとって非常に危いプチブルジョアの危険に終止符を打たねばならない。なぜならプロレタリアートの統一をばらばらに解体してしまうからである。われわれは最大限の統一を必要としている』と云っている。そうだ、共産党員の頭目はふるえながら『最大限の統一』を訴えねばならない。というのは共産党の独裁とまた党自身に深刻な分裂をうちに隠しているからである。

レーニンが真実を語るなどということが果たしてありえるだろうか。最近、労働組合における共産党の討議においてレーニンは『こうしたことはすべて私にとつて死ぬほどたいくつだ。そんなことはいやになるほど経験してきた。私の病氣は別にして、そんなことをみんな投げすてて逃げ出したら、何もうるさいことはなくなつて、さぞ仕合わせなことだろう』と言つた。しかし彼の相棒たちは彼を手離しはしないだろう。彼は彼らのとらわれ人である。彼は彼らがしたと同じように中傷的なことを口にしなければならぬ。

同時に、党の全政策がクロンシュタットの行動によつて妨げられた。なぜならクロンシュタットは『貿易の自由化』ではなく、真のソヴェート権力を要求していたからだ。』

この論説でレーニンが、クロンシュタットに対しどのような立場をとつていたのか、そして、どのような乱雑な対応をしようとしていたのかがあきらかである。

ところで、昨今クロンシュタットに対する、中傷・誹謗の類から、中途半端な同情に至る論評を耳にするが、そのほとんどが、クロンシュタットの叛乱の意味を歴史的に把握していないことが目立つのである。たとえばクロンシュタットでは「貿易の自由化」や「小土地所有者にいくらかの特権を認めること、自由経済の分野をいくらか拡げること」などを、つまり後の「ネップ(新経済政策)」を早く行つておれば、叛乱は起きなかつたであろう、というようなおめでたい歴史の仮定のようなものなどがそれである。そうした「事後予言」を行うような人などもあるのも、スターリンはだめでもレーニンやトロツキーはましたという幻想をもっているからである。そうした議論は事実を踏まえていないわけであ

る。「事実」を「事実」として読みとることは、ある場合には非常に困難を要する。ただ、「年表」的なことがらを「事実」と思い込んだり、またクロンシュタットの「事実」をレーニンやトロツキーの言葉だけでみれば、この場合まさに「事実」は逆立してしまうことになる。であるから「ネップ」を過大「評価」し、かつ、それをレーニンのクロンシュタット叛乱への回答などと解釈すると、それは「事実」ではないことになるのである。

クロンシュタットが、「ネップ」のようなことを要求した叛乱だと理解してもらおうと、第十回大会の後のレーニンの政策は、歴史の教訓ということになるのであるが、そうした理解はクロンシュタットの叛乱の本質とは関係ないことなのである。次の、「旧いレーニン・トロツキー商会」と題する、クロンシュタット『イズヴェスチヤ』の論説を見れば、「新経済政策」のような要求をしていたのではないことが、クロンシュタットの言葉で言われていることがわかるのである。

「それはよく仕事をしてきた——旧いレーニン・トロツキー商会。

権力をもった共産党の犯罪的絶対主義政策はロシアを貧困と荒廃におとし入れようとしてきた。

その後は、後退の時期であった。しかし、労働者によって流された涙と血は、それでもまだ足りないと思える。共産主義者によって嘲笑され、ふみにじられている労働者の権利を求めて、革命的クロンシュタットが勇敢にとりくんだ歴史的闘争のまさにこの瞬間に烏の群れは第十回大会を開くことを決定した。この大会は兄弟殺しの仕事をもっとも成功裡につづけるための手段を講じようとしている。『共産黨員』のあつかましさは極点に達している。彼らは『商業的譲歩』について非常に落ちついて語り、レーニンは素朴そのものといった様子で次のように宣言した。『われわれは譲歩の主義をとりはじめている。この試みが成功するか否かはわれわれにかかっているのではない。しかしわれわれは最善をつくさねばならない。』それとともに彼はポリシェヴィキがロシアを混乱におとしれていることを認め、次のようにつづけた。『もしわれわれが経済的に諸外国に追いつこうとするなら、外国の技術を導入しなければ国を再建することはできない。現状からして、われわれは機械類だけでなく、わが国に豊富にある石炭も外国から買い付けねばならない。われわれはまだ、消費物資を流すために、農業経済の必要な貯蔵物を得るために新たな犠牲を払わなければならないであろう。』

それでは、経済的成果の名によって、労働者を工場の奴隷にし、農民をソフホーズの奴隷にした当の名高い経済的成果というものはいったい

どこに存在するのか。

それは何もないではないか……。レーニンはつづける。『もし、われわれが偉大な村落経済と大工業の再建に成功するとしたら、それはすべての生産者に無報酬で新たな犠牲を払わせることによってのみ可能であろう。』ポリシエヴィキ幹部が、共産党絶対主義のくびきに従順にすすんでやはり込もうとする人に期待させた『よい生活』とはこのようなものである。これはまさにソヴェートの第八回大会で『すべてがすばらしくうまくいっている……。土がわれわれのものならば、パンはあなたがたのものであり、水がわれわれのものならば、魚はあなたがたのものであり、森がわれわれのものならば、材木はあなたがたのものである』と言ったあの農民のことである……。

レーニンは『小土地所有者にいくらかの特権を認めることと、自由経済の分野をいくらか拡げること』を約束している。立派な昔の主人のように、党独裁の悪徳で労働者の首をあとになってはげしく打ち砕くために、彼はいくつかの便宜を申し出ようというのである。『われわれは確かに強制なしにすますことはできない。というのはわが国は疲弊し、おそろしい貧困状態におちいっているからだ。』

レーニンが構想しているのは、建設の仕事、すなわち高水準の商業の譲歩と税金の引き下げである。』

『イズヴェスチヤ』三月十四日付号第十二号)

すでに、クロンシュタット叛乱をめぐる問題を論じつくしたと思う。共産党が目指したものは党独裁による権力の集中、および、政治権力による人民の支配であり、クロンシュタットとは対立が深まるだけだったことも明白になったはずである。

クロンシュタットの叛乱を、革命家のいない新兵ばかりの水兵や赤軍守備隊兵士、労働者による暴動という批難は、レーニンやトロツキーの革命を解体させる陰謀を語るものではあっても、現実の革命的蜂起を否定はできなかった。それにもかかわらず「すべての権力を党にはなくソヴェトへ!」「世界革命万歳!」という水兵、赤軍守備隊兵士、労働者を、つまりこれらの世界革命の前衛であり、軍隊であったクロンシュタットを、レーニンやトロツキーの率いる共産党は、世界に向けて全く逆に反革命の豚どもとなじり、嘘をつき、鎮圧の大部隊をクロンシュタットに派遣したのであった。しかもトロツキーは、自から「ロシア革命の誇りと栄光」と呼んだクロンシュタットの水兵に対し、おしみなく弾丸を使い武力行動に出た。彼は「お前たちを雉子のように撃ち殺すつもりだ」という鎮圧の指令を自ら下したのであった。

スターリンの「子弟」フルシチョフがハンガリアのプタペスト市民に向けて、ソ連軍の戦車を出動させたように、ブレジネフがプラハの市

民に向けて同じようなことをしたように、いやそれ以上に、トロツキーは、自からの現場に出かけ「雉子のように撃ち殺す」ことを直接指示したのであった。しかも、そうした際に出された「最後通牒」が、スターリニストたちに受けつがれ、世界中で乱発されていくことになるのである。トロツキーの「最後通牒」なるものの全文をみると、トロツキーはスターリンがトロツキー自身に下した、同じような中傷の「原型」をいやでも思い浮べずにはおれなかつたはずである。

「労農政府は、クロンシュタットおよび反逆している戦艦に対して、ただちにソヴェート共和国の権力に服従すべき命令を出した。それによって私は、社会主義の祖国に対して反旗をひるがえすものすべてに、即刻武器を放棄するように命ずる。強情に抵抗しつづける者は武器を解除されて、ソヴェート当局へひきわたされるであろう。逮捕された執行委員とその政府代表をただちに釈放せよ。無条件に降服するものだけが、ソヴェート共和国の慈悲にあずかり得るであろう。」

同時に私は武力をもって暴動を鎮圧し、反徒を平定するべき命令を発する。平和な民衆がうけるかもしれない損害の後全責任は、「反革命、反徒にあるであろう。これが最後の警告である。」

共和国革命軍事委員長

トロツキー

最高司令官

カーメネフ

何が「共和国の慈悲にあずかり得る」のだろう。トロツキーのこうしたリゴリズムはスターリニズム体制のそれとどこが違うのであろうか。レーニン、トロツキーによって意思決定された革命クロンシュタット武力鎮圧は、すでにこの二人の革命家の現実政治が「スターリニズム」の理論に立っていたことを明らかにしたのである。ここで、トロツキーが、スターリンの先駆者として、党官僚の反革命性を地で示したのだ。トロツキーの一九二一年の反革命的役割を不問にするトロツキズムはスターリニズムと寸分も違わないのである。

「死刑執行人」トロツキーはクロンシュタットへ激しい砲火をあげせ、すさまじい流血の海をつくり出したのであった。

クロンシュタットの守備隊、市民は一九二一年となって対抗したのであるが、なにしろ、ロシア全国から「だまされて」つれてこられた赤軍兵士のポリシエヴィキの攻撃が続き、不眠不休の中で、遂にクロンシュタットの兵士たちは死んだ。負傷しながらろうじて一命をとりとめた者や、フ

イギリスに亡命した者であらためて出された「特赦」を信じ、出頭したものは、即刻逮捕され、牢獄、収容所、あるいはアルハンゲリ、トルキスタンという遠い地で死んでいったのであった。

おわりに

クロンシュタットについて、とくに一九二二年の叛乱の「事実」と意味について述べて来たが、こんにち、ソ連においてはこうした事実も意味も一般の教科書には記述されていない。レーニンの態度は明らかで、そうした立場から歴史的解释はなされている。また、トロツキーは、実に歯切れの悪い感想をいくつか残しているが、そうしたものは真実ではない。後にトロツキストといわれた一部の「左翼反対派」の人たちの論争を検討してもその論争は核心に到達していないのである。セルジュのような中間派の人に代表される、個人的な「良心」の痛みというものを、私は歯がゆく思うのである。トロツキーに対しても、彼らの間の論争が徹底して行われると、それはトロツキズム批判へと進み、そして、そこからレーニズム、スターリニズム批判へと行きつく過程を生み出す可能性があるわけだが、そうしたことが徹底してやられなかったために、「文学者」トロツキーの、モダニストの世渡りを地で行く姿までが、あわれに見えてくるのである。

クロンシュタットの叛乱は、真理の側に立ちつつも、ロシア革命の途上、△反革命▽のレッテルを貼られた群小の革命的ソヴェート——しかもそれらは、たいした武力対立もない、武装解除の下で鎮圧された——を背負った象徴的存在として理解されねばならない。クロンシュタットは叛乱と共に、トロツキーの武力鎮圧を受けた。ウクライナのマフノ農民軍についても同じようなことが言えるのである。革命中の革命が、どのような形で挫折せざるを得なかったのか、私たちはそのありさまをここにみるわけである。それが「歴史」として語られる場合、隠されたり、ゆがめられ、あるいは遂にすべてが消され知られなくなるわけである。クロンシュタットの叛乱やマフノ運動の歴史を見てゆくと、これらは歴史に残ったけれど、そういうふうな形で残らないで、非常に小さなかたちで、おそらく、人に知られず知られざる戦いを戦いとして戦い、最後の言葉を伝えることもなく、死んでいった革命家たちが、多数いるだろうということが考えられるわけである。

そういう意味においてクロンシュタット叛乱の評価は一つの原則の問題なのである。つまり、ポリシェヴィキを擁護するとか、反革命のために戦うとかという大義のために、クロンシュタット・ソヴェートを壊すか壊さないかという問題を提起しているわけである。その時に、権力を

握っている者達が、「反革命」、つまりクロンシュタットというものを自体を壊すということが、ソヴェート権力を擁護するためになると判断すれば、彼ら自身の思想性というのはそういうところにあるという風に判断せざるを得ないわけである。であるから歴史というのは、現在権力によって証明されることがどうのこうのということではないわけである。逆に歴史によって裏書きされるであろうといういい方をしたところでは歴史を判断する人間とか、歴史を書く人間がほかだったり、駄目な人間だったり、「反革命」の「ブタ」だったりすれば記述もそういうふうになるわけである。しかして、現在の日本の、ロシア革命史の研究をやっている諸君が、ちっともすっきりしないのはそういうことなのである。ある研究者にいわせると結局一九〇五年のロシアの蜂起というものが、「請願運動」から革命的に発展していくという、「血の日曜日」によって裏付けされるような革命のやり方というものがわが日本のかつての「ベ平連」的な、市民主義運動の無原則な運動と同じくラディカルだということになるわけである。そんなものは、何もラディカルでも何でもないわけである。そのようにレヴェルダウンさしたような、ものの考え方というのは、やっぱりよくないわけである。彼ら自身は勿論、精一杯であるから、レヴェルダウンしてはいいことだろう。彼ら自身の中での精一杯であるから、レヴェルダウンと言ったら、非常に、ほめすぎたことになるわけである。であるから、彼自身にとっては精一杯であるだろうけどやっぱり、血ぬられた歴史から見れば、非常に卑猥なわけである。こんにちの状況を公傍観者達でも自分の眼で見ればわかるように、情況主義者というのがあるか、そういう情況主義者の連中というのは、左右のスターリニストにはかならない。そういうのと、旧「ベ平連」みたいなのが一緒になって「革命的」に状況を語るわけである。ところが「歴史」をひもとして六十年代の彼らの位置はどういう立場であったかということを勉強すれば、彼らの一貫性のなさというものがわかるわけである。だいたい日本の駄目な知識人というのは、学生とかモダニストのウーマンリブとか旧「ベ平連」とか、市民の「良心」派を相手にしているから、彼らの主張もモードみたいなものであるから、常に三年か四年で変わるものである。いわゆるモードであったら半年から一年ぐらいで変わるけど、学生というのは四年単位で卒業したり、最近では留年するけれど、そういう形で数年おきに変わるわけで、そういう人たちに向かって思いつきを言っておいて、次の時は自分たちが、今まで言ってきたことを、嘘だといっても平気でいられるわけである。だからもしものを書いてある人であるならその人が、どういうものを書いて、言っているかということを検証すれば、こういうことはわかるわけである。非常に出版目に、「現在」だけ見てあの人は「良心的」だとか、非常に「まじめ」だとか権力から弾圧を受けているとかといわれている。しかし、それは現象にすぎず、そうした判断はいいかげんなもののようにしか思えないわ

けである。情況というのは、そういうふうに非常にいい加減なものがあるわけである。われわれは、根源だけを見ると、ものの方をしなければ、駄目なわけである。それは個別的にものを考えていくということ、個別的な八課題Vに対して自分の存在を対応させていくというものの考え方である。そこからしか類、社会、全体への普遍的回路は出発しないのである。

そういう観点で、クロンシュタットの問題もみなければ意味がないのである。

ところで、トロツキーの言うところの「裏ぎられた革命」、それは、スターリンによって裏切られたと言うことなのであるが、それはクロンシュタットの人たちとか、それから、ウクライナの農民たちを、切り捨てにした言い方でしかない。マフノ軍団に結集した人たちが残している証言によると、農民から農作物を収奪して、それを全部工業化政策にもっていくわけで、この工業化政策というのはレーニン、トロツキーが考えた、いわゆるロシアの工業化政策である。それはスターリンによって引継がれてきたものである。スターリンの農業経済政策というのはひどいものであって、工業政策のために農業を収奪するという政策であったのであるが、これは、実際はレーニン・トロツキーが主張して始められたものである。スターリンの政策の中で、隠れているのはレーニンであるわけで、いかなれば、スターリンの農業政策は、レーニンのそれなのである。

そこで、レーニン、トロツキー、スターリンというポリシエヴィキの八党Vが、何であるかという問題が起きる。しかしそれは別の機会に譲り、私は、いまここでクロンシュタット、一九二一年の叛乱の思想的意味ということについて、まとめをしなければならぬのである。革命の情念を失ったもの、あるいは最初からもっていない集団が、権力をもつと、そこにおこるファシズムとスターリニズムのシーソー・ゲームを私たちは何度でも歴史にみることを、また体験を強いらなければならないのである。たとえば、クロンシュタットの叛乱の意味は、おごりかな八伝統Vということができれば、それは、人間存在における八原則Vの問題だと言えるのである。それが重要な問題なのである。

一九二一年のクロンシュタット叛乱の問題にすることは、トロツキーの言うように、スターリニズムに対する利敵行為でも、トロツキストが言うように、歴史の意味は歴史が与えるものでもないのだ。あるいは、いつの時代にもいる無原則なブラグマ・アナキストを恣意的に引き合いに出し、クロンシュタットやマフノ運動を批判し歴史的に相殺することも意味のないことなのである。なぜならば、ブラグマ・アナキストと、クロンシュタットやマフノ運動とは歴史的運動の継承において何ら関係のないものだからである。二十一年以降、スペイン革命におけるスター

リニストの反革命性も、ハンガリア革命におけるフルンツォフ修正主義もすべて、二十一年のトロツキーの意思決定すなわち、「社会主義国家」を反動勢力や帝国主義の手先から防衛するという名目で武力鎮圧したトロツキーのテルミドールを再現したのであった。革命の原則、思想体験の源初性に固執するとき、このようなテルミドールは拒否されなければならない。なぜなら、個的なものが普遍的である存在とは、原則への固執から（歴史）の直接性を確かなものにするることによって初めて出現するからである。

（付記） 本稿は一九二一年のクロンシュタット叛乱についての歴史的、思想的地位の確認としてまとめたものである。さらに、クロンシュタット叛乱の現実政治からの有効性についての歴史的な分析および考察については別稿にて論ずることにした。

本稿のような論考について、とくにその主題と方法についてこれまでに、本学の中塾 肇教授、郡司利男教授、芳賀 登教授、井門富二夫教授、村松 剛教授、嶋田 厚教授、田代慶一郎教授、野町 啓教授、宮田 登教授、山下雄三助教授、大濱徹也助教授、上笹 恒助教授、森田 孟助教授、田中純一講師、竹村喜一郎講師の諸氏から、機会あるごとに大いなる励ましをいただいた。ここに記して感謝するものである。

尚、引用文献については、特殊な記事を除いてはいちいちこまかに出典箇所を記すことはあえてしなかった。また、日本で刊行されているクロンシュタット叛乱に関する文献は、研究者の間では周知のものばかりであり、あらたに「カタログ」をここで作成する必要を認めなかった。たとえば、ヴォーリン著野田茂徳 他訳『知られざる革命——クロンシュタット叛乱とマフノ運動』（国書刊行会）とか『レーニン全集』（大月書店）等は、常識であり、それらを読まずして、クロンシュタット叛乱を論ずる人もあるまい。Kapacy'的な人間でないかぎりそうした阿Q的人間に調子を合わせる必要もないのである。国際的にクロンシュタット叛乱に関する参考書目として挙げられているのは、Avrich, P.: Kronstadt 1921, Princeton, 1970. の巻末のそれである。とくにわが国では、ほとんど所蔵されていないロシア語文献は、アメリカならではのコレクションであり、書目をながめても、その主題の奥深さを感じさせるものがある。しかし、現在、フォート・コビーによる入手が可能な時代であるだけに貴重な参考書目といわねばならない。アヴリッチがあげたものを阿Q的人間はよしとすべきであろうが、なおここでは、本稿の考論に役に立った主要な参考文献をいくつか挙げることにする。もちろん、ここに記すことがなかったが、役に立たせていただいた文献はこの何倍もあることを言っておこう。そして、論考を構成するものは、文字をもって記述されたものばかりではないことも言うまでもないことである。

参考文献書目

- (1) Бухарин, Н.: Пролетарская Революция и Культура, П., 1923.
- (2) ———: Критика Экономической Платформы Оппозиции, Л.
- (3) ———: К Вопросу о Троцкизме, М., 1925.
- (4) ———: В Защиту Пролетарской Диктатуры, М., 1928.
- (5) Дзержинский, Ф.: Избранные Статьи и Речи, М., 1947.
- (6) Зиновьев, Г.: Сочинения, М., 1924-9.
- (7) ———: Двенадцать Дней в Германии, П., 1920.
- (8) ———: История РКП (В), М., 1924.
- (9) ———: Ленин, Л., 1925.
- (10) ———: Ленинизм, Л., 1926.
- (11) Известия. Кронштад, 1921.
- (12) Известия, М.-Л., 1917.
- (13) За Ленинизм, Л., 1925.
- (14) Коммунист, М., 1924—.
- (15) Корнилов, А.: Курс истории России 19 века. тт. 1-3, М., 1912-1914.
- (16) Далис: Чрезвычайные Комиссии по Борьбе с Контрреволюцией, М., 1921.
- (17) Ленин, В. И.: Полное собрание сочинений. 5 изд. 55 томов и справочный том 1-2, М., 1958-1970.
- (18) Сталин, И. В.: Сочинения в 13 томах, М., 1948-1953.
- (19) Троцкий, Лев.: История русской революции, 1976.
———: Сочинения в 12 томах (15 книгах), М., 1925—.
- (20) ———: Как Вооружалась Революция, М., 1923-5.
- (21) ———: Пять Лет Коминтерна, М., 1924-5.

- (22) ————: *Моя Жизнь*, Берлин.
- (23) ————: *Терроризм и Коммунизм*, П., 1920.
- (24) ————: *Война и Революция*, М., 1922.
- (25) ————: *Между Империализмом и Революцией*, М., 1922.
- (26) ————: *О Ленине*, М., 1924.
- (27) ————: *Запад И Восток*, М., 1924.
- (28) ————: *Положение Октября*, М., 1924.
- (29) Ярославский, Е.: *Рабочая Оппозиция*, М.
- (30) ————: *Против Оппозиции*, М., 1928.
- (31) ————: *Вчерашний и Завтрашний День Троцкистов*, М., 1929.
- (32) ————: *Aus der Geschichte der Kommunistischen Partei d. Sowjetunion*, Hamburg—Berlin, 1931.
- (33) ————: *Очерки по Истории ВКП(б)*, М., 1936.
- (34) Abramovitch, R. R.: *The Soviet Revolution, 1917-1939*, New York, 1962.
- (35) Anweiler, O.: *Die Rätebewegung in Russland, 1905-1921*, Leiden, 1958.
- (36) Avrich, P.: *Kronstadt 1921*, Princeton, 1970.
- (37) Barrine, A.: *One Who Survived*, New York, 1945.
- (38) Berkman, A.: *The "Anti-Climax"*, Berlin, 1925.
- (39) ————: *The Bolshevik Myth (Diary 1920-1922)*, New York, 1925.
- (40) ————: *The Kronstadt Rebellion*, Berlin, 1922.
- (41) Browder, R. P. & A. F. Kerensky, ed.: *The Russian Provisional Government, 1917*, 3 vol., Stanford, 1961.
- (42) Bunan, J.: *The Origin of Forced Labor in the Soviet State, 1917-1921: Documents and Materials*, Baltimore, 1967.
- (43) Carr, E. H.: *The Bolshevik Revolution, 1917-1923*, 3 vol., New York, 1951-1953.
- (44) Carroll, E. M.: *Soviet Communism and Western Opinion, 1919-1921*, Chapel Hill, 1965.
- (45) Chamberlin, W. H.: *The Russian Revolution, 1917-1921*, 2 vol., New York, 1935.

- (46) Ciliga, A.: *The Kronstadt Revolt*, London, 1942.
- (47) Deutscher, I.: *The Prophet Armed: Trotsky 1879-1921*, New York, 1954.
- (48) ———: *Soviet Trade Unions*, London, 1950.
- (49) Dewar, M.: *Labour Policy in the USSR, 1917-1928*, London, 1956.
- (50) Dukes, P.: *Red Dawn and the Morrow*, New York, 1922.
- (51) Goldmann, E.: *Living My Life*, New York, 1934.
- (52) ———: *Trotsky Protests Too Much*, Glasgow, 1938.
- (53) Kolbin, I. N.: *L'opposizione operaria in Russia*, Ed. Azione Comune, Milano, 1962.
- (54) *Manifest der Arbeitergruppe der Russischen Kommunistischen Partei*, Berlin, 1924.
- (55) Mett, I.: *La Commune de Cronstall: Crépuscule sanglant des Soviets*, Paris, 1949.
- (56) Miljutov, P. N.: *Russia Today and Tomorrow*, New York, 1922.
- (57) Morizet, A.: *Chez Lévin et Trotski, Moscou 1921*, Paris, 1922.
- (58) Pollack, E.: *The Kronstadt Rebellion*, New York, 1959.
- (59) Petrov-Skitaletz, E.: *The Kronstadt Thesis for a Free Russian Government*, New York, 1964.
- (60) Prokopovitch, S. N.: *The Economic Condition of Soviet Russia*, London, 1924.
- (61) Rosmer, A.: *Moscow sous Lenine*, Paris, 1953.
- (62) Schapiro, L.: *The Communist Party of the Soviet Union*, New York, 1960.
- (63) ———: *The Origin of the Communist Autocracy*, Cambridge, Mass., 1956.
- (64) Serge, V.: *Le Tournaït Obscur*, Paris, 1951.
- (65) ———: *Memoires d'un Revolutionnaire*, Paris, 1951.
- (66) ———: *Vie et Mort de Trotsky*, Paris, 1951.
- (67) Thalheimer, A.: *Eine Verpasste Revolution?* Berlin, 1931.
- (68) Trotskij, L. D.: *Towards Socialism or Capitalism*, London, 1926.
- (69) ———: *The Real Situation in Russia*, London, no date.

- (70) —————: *The Stalin School of Falsification*. New York, 1937.
- (71) —————: *The Suppressed Testament of Lenin*. New York, 1935.
- (72) —————: *Écrits*. Paris, 1955.
- (73) —————: *The Revolution Betrayed*. London, 1937.
- (47) —————: *Stalin: An Appraisal of the Man and His Influence*. New York, 1946.
- (49) Voline (V. M. Eikhenbaum): *La Révolution inconnue (1917-1921)*. Paris, 1945.

Über das Gedankenniveau des Aufstandes in Kronstadt 1921 in der gegenwärtigen Geschichte

Shigenori NODA

一九二一年・クロンシュタット叛乱の現代史に於ける思想的地位

Erstens wollen wir hier feststellen, was der Aufstand in Kronstadt im Jahre 1921 eigentlich bedeutet, und in welche Phase Revolutionäre Lenin, Trotzki und Stalin dabei treten. Zweitens wollen wir das Wesen von Stalinismus und Trotzismus erörtern. Drittens, über die genaue Schätzung an diesem gescheiterten Aufstand muß der Unterschied des Standpunktes klar gemacht werden zwischen mir und denjenigen Leuten, die Stalinisten oder Trotzisten in unserem Land heißen.

Daß man nun seine eigene Geschichte gewinnen kann, ist nichts anderes, als man zu demjenigen Zeitraum, in dem man wirklich lebt, viel Geduld hat. Das heißt, daß man mitte in den von seinem gleichen Zeitalter gezwungenen Lebensspannungen leben muß. Wir sind sicherlich in Gefahr, mit der Sklaverei leben zu müssen, wenn wir keine Beziehung der Kategorien von Gattung, Ganze und Gesellschaft gegenüber dem Individuum festhalten wollen.

Hat sich nun die politische Situation, die uns heute immer noch zu belagern scheint, etwas geändert? Sicher ist, daß wir selbst gerade eine solche Situation nicht belagern, sondern die Situation uns belagert. Was geschieht denn heute nach politischen Kämpfen der 60er Jahren und auch einigen politischen Ereignissen der 70er Jahren? Die Frage wird dadurch genug geantwortet, daß jeder auf seine eigene Lebensspur zurückblickt. Ein Gedanke kann doch gar nicht existieren, solange man seinem eigenen geschichtlichen Zeitraum nicht gegenübersteht. will.

Es gibt die Methode einer Geschichtswissenschaft, die sich trotz der Gedankenlosigkeit die schlechte Nachfolge zur Politik erlaubt, welche leider immer noch bis zur heutigen Zeit wiederholt worden ist. Hier gibt es selbstverständlich keine eigene Tat, wo man sich selbst gegenübersteht. Ohne Zweifel kommt daraus eine sogenannt Mythos formende Methodologie der Geschichtswissenschaft in der Politik; das heißt eine regimetreue bzw. parteitreuse Wissenschaft. Unabhängig davon, ob man persönlich regimetreu ist oder nicht, sind die einem Regime dienenden Wissenschaftler alltäglich da. Solche Wissenschaftler reden oft von Wissenschaftlichkeit. Was sie reden, ist bloß eine Theorie, eine Art Mythos, der gewiß von einer bestimmten politischen Macht gefordert wird. Es geht hier also um das, was die Geschichte des Menschen absichtlich zu einem Zweck entlang zu beschreiben ist. Kann ihre Wissenschaft zwar gut als eine regimetreue Geschichtswissenschaft, die das Volk hart herrschen möchte, funktionieren, aber das ist keine Frage, daß sie gründlich weder auf der Seite des Volkes steht und sogar noch wissenschaftlich ist. Wenn wir jetzt geschichtlich unser Problem sehen, ist diese geschichtliche Anschauung interessanterweise dadurch zugelassen worden, als ob sie im allgemeinen eine Wahrheit wäre, daß die Sowjetunion oder die Volksrepublik China es anerkannt hatte. Das Beispiel der Japanischen Kommunistischen Partei ist der Fall. Für sie ist es dabei überhaupt eine andere Frage, ob die entsprechende Weltanschauung in ihrem Land Gültigkeit hat. Von der Zeit, worin die Arbeitsgemeinschaft der Geschichtswissenschaft als parteitreu Organ ihre Aufgabe getragen hatte, bis zum heutigen Tag, behauptet sie dergleichen.

Wer in der Stalinischen Zeit nach der Russischen Revolution forschen wollte, war seine Kritik an den Stalinismus ganz verboten. Erst nach dem Tod Stalins kritisierten manche Historiker darüber heftig. Ich nenne sie typisch Stalinisten, die immer nur praktische Rolle für das System der Staat spielten und tatsächlich ihre Geschichtswissenschaft der Staatsgewalt unterordneten. Was das Wesen des Stalinismus in der Sowjetunion eigentlich war, laß sich auch damit beweisen, wie heftig das Regime Khruschovs damals die Ungarische Revolution untergedrückt hatte. Dabei unterstützte niemand unter regimetreuen Historiker den Aufstand des ungarischen Volkes. Die Forscher der sowjetischen Geschichte machen heute einerseits dem Stalinismus bittere Vorwürfe. Mit demselben Mund versuchen sie aber andererseits, die glänzende Leistungen von Stalin als geschichtliche Tatsache hoch zu schätzen. Zu den regimetreuen oberflächlichen Forscher gehören irgendwie doch fast alle Forscher der sowjetischen Geschichte in unserem Land. Unter diesen Umstände wird es schon sehr deutlich, daß sie keine gründliche Kritik gegen den Stalinismus zu üben vermögen. Also die Stalinistische Epigonen schämen sich davor nicht, daß sie 10 Runden als ihre Vorläufer nachlaufen. Und sie haben wirklich die Illusion, als ob sie an die Spitze der Gruppe gelaufen wären. Wie sich diese Wissenschaftler bzw. ihre Gruppe auch vorstellen mögen, sind sie mir ganz egal. Sie sind alle wesentlich gleich.

Man sollte nicht nur Stalin allein für den Stalinismus verantwortlich machen. Dies kann man gut verstehen, wenn man die Struktur seiner politischen Macht und seine Industrialisierungspolitik genau beobachtet. Stalin selbst hatte der Strategie von Trotzki sowie Lenin gefolgt. Der Stalinismus enthält nämlich sowohl Trotzkiismus als Lenismus. Es wäre eine sehr falsche Meinung, wenn man behauptet, Stalin habe einen schweren Fehler begangen, während Trotzki und Lenin im Grunde richtig getan hätten. Unter dem Bolschwikischen Regime erlebte Stalin bereits ausführlich, mit welcher Weise andere Partei als Bolschwik verfolgt worden waren. Er hatte dann mit der gleichen Methode alle die gegen sein Regime politische Gruppe ausgeschlossen. Zur Front der Spanischen Revolution setzte Trotzki in seiner Exilzeit in Mexiko eine öffentliche Erklärung in Umlauf, in der er für berechtigt hielt, daß er damals vielen revolutionärischen Soldaten, Arbeiter und Bürger hatte ermorden müssen. Er versuchte damit zu ignorieren, daß die spanische Anarchisten und diejenige Anarchisten, die zum Beispiel aus Italien und anderen Ländern dort hinkamen, gegen den Stalinismus in Spanien kämpften.

Der Aufstand des Sowjets in Kronstadt gegen den Bolschwik und das Unterdrücken der Bewegung der von Makhno geführten Bauerarmee waren für Trotzki nicht nur der Stein des Anstoßes. Sie bedeuteten auch zugleich den Ausgangspunkt, aus dem die Lehre von der politischen Säuberung des Trotzkiismus bzw. Stalinismus entsteht.